

立ち読み版

今号の特集

触手づくし

新連載小説

『淫妖蟲 凶』

斐芝嘉和×汰尾乃きのこ
原作:TinkerBell

カラピンナップ

うるし原智志

ぼっしい

方天戟

ちょびぺろ

連載&
読み切り小説

山本沙姫×こうきく／酒井仁×牡丹
火村龍×ふみひろ／酒井仁×あまさひかえ
空蟬×ちょびぺろ／上田ながの×宮越良月

えっちマンガ

楠木りん／天海雪乃／ひぐちいさみ
ぱふえ／ふみひろ／海原圭哉

表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス

vol.80
2015.02

DIGITAL
EDITION
電子版

成年向け雑誌



少女退魔師 穂乃果の末路

うっせみ
空蝉
小説
NOVEL

挿絵
ILLUSTRATION
ちよびぺろ

夜の校舎に這い回る異形の者を
凜々しき少女が討滅する！



た。

丑三つ時。闇に包まれた学舎に月明かりが差し込んで、階段を上る少女の横顔を照らす。忍び足で歩む少女——穂乃果の靴音だけが、静寂の中に鳴り響いていた。

「気配はする。……こちらの出方を窺ってるの？」
ポニーテールに結んだ黒髪を手で梳きながら、勝負の窺える両眼を瞬かせる。

少女のすらりと伸びた手には鞘に納めた刀と、白い札がそれぞれ握り締められていた。どちらも家から持ち出した、少女が常日頃愛用している代物だ。

妖怪の類を祓う退魔師を生業とする家に生まれ、自身も見習いとして修行の日々を送る穂乃果が最初に異変——怪異の気配を感じ取ったのは二日前。ほんの一瞬だけ気配を現しておいて掻き消えたそれを、当初はさほど気に留める事もなかったのだが——。

昨夜、校舎で女子生徒と男性教員が一名ずつ、消息を絶つた。逢引目的で校舎を訪れたらしい二人が、消えたと思しき時間帯、昨日の丑三つ時に、また、より強烈な怪異の気配を穂乃果は感知していた。

「まるで「俺はここにいるぞ」って意思表示するみたいなの、不遜で悪辣な、吐き気催す妖気だった」

禍々しい妖気は、今なお校舎内に充滿している。妖怪の類は人肉や、生物の邪な感情を餌とする物が多い。腹を満たして気が緩んでいるのか、あるいは新たな餌を誘い込む気であるのか。

いずれにしろ、正義感と使命感に駆られる少女に看過できるものではない。

「見つけた……！ もう、逃がさない。姿を現せ、異形の者……！」

習いたての呪印を結び、手にした白札に念を込めると、呼応して札の表面に梵字が浮かび上がる。魔に属するものを抑え込むための呪式が刻まれたそれを、封魔の文言を唱えつつ、ひと際強く妖気を感じた場所——三階女子トイレの個室の戸へと投げつけ

「う……っ」

肉の焦げるような音と共に燻る瘴気の臭みが一斉に噴き出してきて、少女の鼻を衝く。妖気を感知できるがゆえ、より強烈に突き刺さる異形の者の悲鳴と憤怒に晒された穂乃果の表情が歪む。

（気を強く持つて。平常心、冷静に状況を見極め、最適の手段で応じる……）

気圧されれば、一気に付け込まれる。術者に求められる心得。両親に教えられた全てを心の内で反芻しながら、戸の隙間より這い出てくる異形の姿を見据える。

芋虫の胴をひたすら長く長く伸ばしたような姿で、うねりとくねりを見せつける、肉厚の触手の群生体。赤黒い体躯はヌメヌメと、粘りのある液体を大量に滲ませていた。這いずるたび、そのぬめりが、ズリユ、ズリユと不快な音色を奏でて、穂乃果の平常心に揺さぶりをかけてくる。

（母様から聞いた事のある奴だ。情欲にまみれた人間に絡みつき、吸って喰らう……淫魔）

全貌を現したその様は、さながら巨大な食虫花。無数の触手の中枢に、ぼつかりと開いた襲付の肉穴部分が、まるで呼吸するように脈動していた。穴の内部からは溶解液だろうか、よだれの如くダラダラと粘液が滴り落ちていた。

餌を喰らったその妖怪は、さらなる獲物を求めて飽くなき食欲を肥大させ続ける——。母親に聞かされた話通りの兆候が、目の前の異形に見て取れる。

やはりこいつが昨夜逢引をしていた二人を喰らってしまったのだ。事実認識した事で尚更怒りが降り募る。

「人を喰らいし妖よ。滅すべし……！」
孕んだ怒気を声に乗せて吐き出せば、退魔の呪が

刻まれし刀を握る手にいつそうの力がこもる。

吐き出したりない怒りは、初めての退魔行に臨む恐怖と緊張とを抑え付ける役割を果たし、スカートのポケットより取り出した新たな札に注ぐ退魔の呪力の糧ともなった。

意気昂揚する少女退魔師を粹の良い餌と見定め、異形の触手妖怪が這い迫る。

「——来いっ！」

もう、異形を見つめる眼に恐怖の色は微塵もない。必ずやり遂げる、やり遂げられる。そうしてこの経験を目日に活かし、やがて父や母のように立派な退魔師になるのだ。怪異に抗うすべのない者のため、人々の日常、笑顔を守るそのために。これから生涯をかけて、誇りある任務を全うするのだと、

一片の疑いもなく。その未来が、脆く崩れ去る事などあるわけがないと、ただ頑なに、盲目的に信じきっていた——。

——ぎぢゅぢゅにゆぢゅゆるるうううっ！

「くっ、ううっ、離れろっ、ぐうっ、うううっ！」
半時前まで昂揚と使命感に満たされていた少女の肢体が、巻き付く異形の触手群に締め上げられる。身が軋むほどの圧迫感と、まとわりつくヌメリに覚える生理的嫌悪。二重の苦しみに苛まれる穂乃果の胸中は、今や、後悔の念で一杯だった。

敵が本来の実力を隠していたせいもあり。未熟な己でもなんとかなると思いついた、少ない攻撃手段で挑んでしまった。

（呪炎札も、退魔刀も通じなかった……っ）
全ては相手との力量差がありすぎたため。触手妖怪の目論見にまんまと乗った、馬鹿な餌。そんな自虐を噛み締めたところで、制服ごと肌に入っている締め付けは緩みはしない。

——ビチッ！ ビチッ！ ビチィッ！

「ひっ！ ぐ！ あう！ んう、うあ……ア！」
身動き取れなくなった獲物を弄ぶが如く。鞭のようになつた触手が幾度も、幾度も降り注ぐ。ぶつかり弾けるヌメリのせいで濁つた音色を響かせながら、怪異の暴力の前に、あまりにも脆い制服の端々が引き裂けてゆく。

「ひう！ あ、や……あ！」
ついには胸元までも引き裂かれ、ブラジャーに覆われた膨らみが剥き出される。

人気のないとはいえ常日頃過ごす学舎。下着越し、さらに怪異相手とはいえ秘部を晒す事態に、全身が火照るほどの羞恥が湧き起こり。

（早く、どうにかして脱出しなきゃ……!）

焦りが、平常心を薄めるのと同時に、抵抗の糧となつた。よりいっそう四肢に膂力を込めつつ、改めて呪いのための気を練り始める。

そんな少女の抗いを嘲笑うように。縦長の透明の管を先端に持つ触手が、ブラ越しの乳房へと鎌首をもたげてくる。

「……っ！ な……にを、するつもりよっ!」

相手は淫らな人間を糧とする怪異だ。如何わしい真似をされるのでは、との疑念が自然と湧く。

そしてそれは、穂乃果が身構え覚悟を決めるよりもわずかに早く。すぐに現実となつて若い肢体にもたらされた。

——ビュッ、ビュビュウッ!

「いあッッ!! 熱っ、ううう……っ!」

管の内部より噴き出た飛沫を吹き付けられ、まともにも浴びた右乳房が、その熱量に驚き弾む。反射的に開いた口腔より、少女の甲高い悲鳴が吐き漏れた。

茹だるような熱気を感じ肌が慄いてはいるものの、幸いにして痛みを覚えるほどではない。束の間の安堵に包まれつつ、恐る恐る己の胸を見つめ直し、また新たな驚愕に苛まれる。

「そ……そんな……と、溶け……て?」

飛沫を直接浴びたブラジャーが見る間に溶け崩れ、桜色の突起と、きめ細やかな乳の肉が露わとなつてゆく。無防備状態となつた右乳房を味わうべく、吸着管の内に溜め込まれた飛沫が、ぼたり。改めて続け様に乳首へと降り注ぐ。

「ソウ! ひ、やつ……嫌。嫌あああああッ!」

溶けゆく下着を目にした直後なだけに、肌そのものまでも溶かされるのではという悪い想像が胸中に敷き詰められていた。

袋小路に追い詰められた小動物と同様、恐慌状態に陥つて首を振り、声の限りに吠え叫ぶ。平常心を繕う余裕はすでになく。

札と退魔刀は未だ手にしてこそいるものの、ギチギチに拘束されて、呪力を込める印を結べないでいる。抗うための武器も今はないも同然だ。

できるのは身を振り、悲鳴を上げる事だけ。そのどちらかが、異形の喜悦を煽り立てる結果を生む。少女の負の感情全てを嬉々と愉しんだその後、ひと震え。吸引管が収縮し、勢よく両乳房へと吸い付いてくる。

「ふあ……!! やあ……!」

肉ごと吸引される感覚に慄きつつも、思わずこぼれた熱い吐息。こぼした自身さえ甘い声の響きに驚き目を剥く。予想外の恍惚に打ち震え、管の内で乳首が弾む。練れだしていた穂乃果の呪力が拡散する。まるでそれを待つていたかのように、満を持して管が本格的な吸引を開始した。

——ヂュッヂュッヂュウウウウウウッ!

「いひや……っ! ひやつ、らあああッ……!」
食いつかれた左乳房を覆う制服と下着が溶け失せる。その様を見つめる事しかできない無力さを噛み締めて、自然と悔し涙が目尻に滲む。

喘ぎ喘ぎバクつく唇をどうにか引き締めようと躍

起になつてゐるのに、後から後から吐き漏れる唾と嬌声が、それを良しとせず。

飛沫を浴び、吸引される乳房にジンと甘い疼きばかり蓄積されてゆく。

（ど、うつ、して……こんなにも気持ち悪いと思つてるのに、嫌、なのにつ……!）

ギョポギョポと音立てて乳房を吸いたてられるたび、火照りと共に訪れる煩悶を、肉体が嬉々として受け止めたしている。吸引される乳肉が引き伸ばされるにつれて、痛みを覚える代わりに頭の中に淫熱が侵攻し、抵抗心を削いでゆく。

気を確かに持てば、清廉に生きる自分が淫魔の手管に貶められるわけがないと、思い込んでいた。

実際は、恐らく飛沫に混入する興奮作用に苛まれ、まんまと性欲を掻き立てられてしまつてゐる。未熟な己を過信し、相手を侮つた結果がこの様だ。

（このまま、一族の恥を晒したまま終われない!）
それでも今となつては耐え忍びきつて、反転攻勢の機会を待つ他、手だてがない。

悔し涙を振り払い目尻を細め、強い決意を表す。

——ずりつ、ずりりイッ!

そのタイミングを見計らつたかのように、触手が新たな攻撃を仕掛けてくる。

「ひう……っ! や、つああ、そこっ、嫌あ!」
ジンジンと染む疼きに困え喘ぐ胸元に気を取られるうちに、知らず知らず穂乃果の両脚は大腿開きとなり、股間を敵の眼前へと曝け出してしまつていた。

露わとなつたショーツの股布部分が、湿り気を帯びて染みとなつてゐる事に、穂乃果自身が気づいて

羞恥に頬を染める。それよりも、ほんのわずかに早く。飛来した触手群が芋虫の腹のように節くれ立つ胴体を押し当てた。

「んううッ! はあッ……ひイイ!」

吸着した異形と股肉との間で、ブヂュッと泡立つ

飛沫が滲み出る。異形の表皮を覆う体液、女を淫靡に狂わせる液体——それをもろに浴びせられた少女の股間が、見る間に熱を帯び、耐え難き疼きを発する。

「うう、ふつ、うう……こんな事ぐらいで、私はつ、負けないつ、負けたりしな、いひイッ!!」

獲物の気丈さを突き崩そうと、吸着した触手が股肉を磨りだす。尻の側から股間前面へと頭を覗かせた一本が、胴全体を張り付かせたまま、ズリズリと前進、後退を繰り返す。

「はひっ! いひやあつ……! やめつ、やめろおつ、動くな、擦るなあつ、ひつひやあつ!」

行き来されるたびに鼠蹊部が浅ましく震わされる。ショーツの薄い生地を容易く染み抜いた異形の媚体液が、グチュグチュと、卑しい音色を奏でて処女肉に摺り込まれてゆく。

声を抑え込もうとときつく嘯み縮めたはずの上顎と下顎がガチガチとぶつかって鳴る。そうして再度開かれた口蓋から、唾の飛沫と共に、いつそう艶を帯びた嬌声が迸った。

「ひいあつあひつ、イイッ! ひつ、つああ! はひッ……イインンッ!」

摩擦されるたび蓄積する熱に浮かされた恥丘が、細かな痙攣を始め。まだ辛うじて薄布に守られる陰唇が、内部より染み出る蜜のヌメリによって開き、パクつき始める。

じきに判然とした言葉を発する余裕すら失われてしまい、不屈の意思を示すのは、きつく細められた眼のみとなった。

「はっあ、ア……まだ、アッ……堪えられる。あ、相手の出方を注視し続けていれば、絶対に転機は来る……。このまま耐えていれば、きつとつ」

さらなる攻勢に打って出ようとする怪異に隙が生じるかもしれない。一縷の望みを託し、耐え忍び続

ける少女を支えるのは、誇り。心より尊敬する父母が、先祖が代々継いできた退魔行という職への誇りに他ならなかった。

「んひッ! はつ、ああつ……ツツ! 耐えて、みせるつ、んくふつ、うううう……!」

これまで自慰の経験すらなかった女体が絶え間のない疼きに苛まれ、開閉を繰り返す膣口からは止め処もなく、粘り気の強い蜜が噴き漏れている。

内より漏れ出た汁と、外から摺り付く怪異の体液。内外の侵食によって、ショーツはすつかり濡れそぼち、黒々とした恥毛を透けさせてもいる。

「デユボツ、デユ、デユボデユボツ!」

「ひぎゅつううううつ、乳首つ取れちやつ、ああああつひひひイイぐううう!」

引き千切れるのではと思うほど強烈に吸引された乳房が、縦に引き伸ばされながら火照りと疼きを放散する。股に気を取られている間にすつかり隆起した勃起乳首が、飛沫を浴びせられるたびに切なく弾み、よりいっそうの刺激を欲しているように見えもした。浅ましい反応を見せる己の身体を目視すれば

するほど、誇りにすがれる心根が無力に思えもする。(違う……! 無駄なんかじゃ、ないっ……)

女心が否応のない恍惚に揺さぶられ、知らず知らずの内に震えているのを見て取った瞬間。細められた目尻に新たな悔し涙が滲んだ。

隙間なく密着する管によって摺り捏ねられ、伸びきってしまったいた乳頭が一点、押し潰れる。甘い疼きが瞬時に増大して、媚薬漬けの女体が痛みを覚えるほど。

「はひつ、ひつ……は……はひつ、いい……!」

呼吸もままならず、涙と鼻水、よだれを垂らしながら無様にしゃくり上げる。痙攣する手足をばたかせ暴れる事すら、拘束状態では許されない。

苛烈すぎる疼きは胸先から頭へと伝染し、抵抗を志す意識そのものを刈り取らんとする。

「後だけ耐えればいいのだから。本当に反転機会など訪れるだろうか?」

(だ、め……。弱気になったら付け込まれるつ) 誇りと肉欲。相反する感情の綱引きが延々続く状況は、長引くほど肉の欲の側に傾いている気がしてならない。だから早く、早く隙を見せて——。

乞うように見つめた先で、食虫花を思わせる怪異の本体が大口を広げる。もがく少女の瞳には、それがまるで嘲笑っているように見えた。

「ひつ……!」

肉欲に浸りきつた人間を、あの大口で溶かし喰らうのだ。母から教わった知識があるだけに早々に状況の逼迫を理解する。そうして生じた恐怖心までもが、肉悦と連なつて少女の決意を揺さぶった。

「ひやつ、ひ、やあつ、やだあああつ」

二足を捕える触手が、ズリ、ズリ、と大口へ供物を引き寄せてゆく。その緩慢な速度が余計に恐怖を駆り立てる。

拘束の強まった腕や胴を震わせる事もできず。ただ唯一自由になる首を嫌々と振る様は、なりふり構わずしゃくり上げていけるせいもあつて、駄々捏ねる童女を思わせる。無様で無力な己を自覚して嘆くその胸に、さらなる快楽刺激が訪れる。

「ひぎッ! いあつ、ひつイイン——つ!」

押し潰れた状態の勃起乳首を強かに捏ねくられ、穂乃果の臉裏に悦の白熱が弾ける。押し出された涙が煌めきこぼれるのと同時に、乳首から胸奥、背を伝つて腰の芯へと、雷電の如き愉悅衝動が迸った。

「ぐちゅ! ちゅぐちゅぐちゅぶぶうつ!」

その衝動をさらに育むべく、股肉に張り付く触手が躍動する。これまでの緩慢さが嘘のように素早く幾度も幾度も処女股座を擦り扱いては、媚体液と牝蜜とを掻き混ぜてゆく。

「はひつ、ひつ……は……はひつ、いい……!」

呼吸もままならず、涙と鼻水、よだれを垂らしながら無様にしゃくり上げる。痙攣する手足をばたかせ暴れる事すら、拘束状態では許されない。

苛烈すぎる疼きは胸先から頭へと伝染し、抵抗を志す意識そのものを刈り取らんとする。

「後だけ耐えればいいのだから。本当に反転機会など訪れるだろうか?」

(だ、め……。弱気になったら付け込まれるつ) 誇りと肉欲。相反する感情の綱引きが延々続く状況は、長引くほど肉の欲の側に傾いている気がしてならない。だから早く、早く隙を見せて——。

乞うように見つめた先で、食虫花を思わせる怪異の本体が大口を広げる。もがく少女の瞳には、それがまるで嘲笑っているように見えた。

「ひつ……!」

肉欲に浸りきつた人間を、あの大口で溶かし喰らうのだ。母から教わった知識があるだけに早々に状況の逼迫を理解する。そうして生じた恐怖心までもが、肉悦と連なつて少女の決意を揺さぶった。

「ひやつ、ひ、やあつ、やだあああつ」

二足を捕える触手が、ズリ、ズリ、と大口へ供物を引き寄せてゆく。その緩慢な速度が余計に恐怖を駆り立てる。

拘束の強まった腕や胴を震わせる事もできず。ただ唯一自由になる首を嫌々と振る様は、なりふり構わずしゃくり上げていけるせいもあつて、駄々捏ねる童女を思わせる。無様で無力な己を自覚して嘆くその胸に、さらなる快楽刺激が訪れる。

「ひぎッ! いあつ、ひつイイン——つ!」

押し潰れた状態の勃起乳首を強かに捏ねくられ、穂乃果の臉裏に悦の白熱が弾ける。押し出された涙が煌めきこぼれるのと同時に、乳首から胸奥、背を伝つて腰の芯へと、雷電の如き愉悅衝動が迸った。

「ぐちゅ! ちゅぐちゅぐちゅぶぶうつ!」

その衝動をさらに育むべく、股肉に張り付く触手が躍動する。これまでの緩慢さが嘘のように素早く幾度も幾度も処女股座を擦り扱いては、媚体液と牝蜜とを掻き混ぜてゆく。

「はひいつ、いあつあはああアアア……ッ！」
 恐慌に囚われていた心根が、瞬時に肉の悦び一色に染め抜かれた。

乳吸引と股抜き。二重の愛撫に蕩かされた女体は、手足の指を掃かれ、しゃぶられた。ただそれだけの事にさえ過剰感応し、激しく跳ねる。

「わたつ、わたしっ……誉ある退魔の、一族……んはああつ、あはつあひいんんっ！」

誇りに頼りすがつてみたところで、もはや、盆をひっくり返したように一斉に溢れる愉悅を抑制する事はかなわない。かえって惨めな実情を痛感し、被虐の悦という新たな煩悶の種を孕んでしまう。

——駄目。こんな状態で留め置かれたら、あと何分も持たない。頭も身体もおかしくなる——。

本能的な警鐘が胸の内でも鳴り轟く。それすら乳吸引の恍惚に吞まれ消し飛んでしまう。

——ずり、ずりりっ！

「んひやああつ！ はひつ、ひつ、イイ……っ、それっ、やああつ！」

大口へと引き寄せられ近づくほどに、股根への摩擦圧が強くなる。醜悪で卑劣な異形のもたらず甘い罠。頭では理解できているのに——。

「ふああつひつ、いっひいんんっ！ ひやらあつ、しよれつ、グリグリしひやつ、あひいイイッ！」
 すつかり濡れそぼち物の役に立たなくなつた下着恥肉に張り付き割れ目の形状までくつきり浮かばせるショーツの上から、乳首以上に勃起したクリトリスを執拗に責められる。

喜悅に打ち震え脱力する女体は、見る間に大口へと引き寄せられていった。

「い……ひや……ああ……」

とうとう眼前へと迫つた食虫花が、より大きく口を広げ、膨張する。もはや成すすべない状況に怯えながらも決死の、儂い抵抗を試みる餌の様子をひと

しきり観察した後。傘のように広がつた花弁がそのまま穂乃果の頭部を呑み込み、胴から足元までひと口で、呑み込んでいった。

——ぐぢゅぐぢゅぐぢゅぐぢゅっ！

「んううううううっ！」

処女餌を口中に収めた怪異が、咀嚼しているのかヌメリに満ちた空間に押し込められた穂乃果の身体が、足場も定まらぬ状態で、蠢く肉壁の動きに合わせ上下左右に回転する。じきに平衡感覚を失くし、眩暈と酔いとが肢体に巡り。

——びぐっ、びぐびぐんっ！

「んひいっ、やらつ、やらああああつ！！」

肌、髪に、鼻孔、耳、乳房と股肉、そして悲鳴を上げた口腔から。大量に流入する怪異の媚体液に侵された女体が、けたたましく前後に飛び跳ねた。

（な、に……これっ!? 身体、っ、あ、頭もおおつ、ジンジン痺れつ、おおつ、おかしくなるうううう！）

頭の芯まで突き抜ける、これまでにない多幸感。勃起乳首と勃起陰核に響き渡る、苛烈な悦の痺れ。開閉を繰り返す膈の奥から、雪崩の如く押し寄せる甘く切ない疼きと、蜜の海。

「はひいッ、いッ、んぐううううううううう!!」

弾力のある壁面は湿りきつていて、びつしりとイボが生え並んでいる。それがギユウギユウと四方から狭まって、呑まれた女体を締め上げ、舐め転がっていた。

（ブヨブヨでグチュグチュ……グルグル回されて気持ち悪いのに、なのに……いっ！）

汁だくのイボに擦れたそばから、衣服が溶け崩れてゆく。指先、脇下、内腿、背筋、うなじ。露出した素肌に片つ端から粘液が染み、なおいっそうの煩悶を余儀なくされた。

初めての絶頂を味わわれ、処女肉が急速に蕩け、花開いてゆくの嫌でも痛感させられる。

全身を隙間なく巨大な舌で舐られているような感覚。悪寒を覚えて然るべき状態に陥つてなお続く絶頂の波が、刺激を受けてより大きく化け、しつこく尾を引く。

「ふぐっ、うう……んっ、ふつうう、もつ、お、やつ……ふぐうんッ！ ンンンン——ッッ！」

へその下辺りより湧き出た悦楽の塊が射出され、パクつく股の割れ目より液体となつて噴き上がる。（ああ……また胸に、お尻に、感じる。ヌメヌメの嫌らしい感触が、ズリズリ、ゴシゴシくるうう！）

女体の中でも敏感な部位を執拗に舐り上げ、ブヨブヨの壁面で突つつかうように、揉み込むように。緩急と強弱を使い分けた愛撫を施し続けてくる、卑猥な妖怪。

「っひひやああうっ！ やはっ……吸つちやあ、っひひやアアア！」

ショーツが溶け露出した淫唇に、近場のイボ壁が吸い付き、漏らすそばから蜜を啜り飲んでいった。

おかげで絶頂の余韻はさらに延長され、いつては漏らし、吸られてまたイク。

少女にとつては悪夢の如き、異形にとつては効率のな養分捕球の循環が続く。

「ひぐっ！ まらああつくるううううっ！」

口中に溜まる汁を啜る怪異の唇の舌もごもごとした蠢きにすら呼応して、火照りとヌメリまみれの女体が飛び跳ねる。

チューインガムを味がしなくなるまで堪能するが如く。執拗に咀嚼されるその都度、押し当てられたイボ壁からブチュッと媚体液が噴きかかり、塗り込められてゆく。すでに全身くまなく塗り込められて

いる肌の上に幾重も、幾重もベタベタと。怪異の臭いが染むほどに肉は蕩け、奴好みの味わいと柔らかさを備えていくように思われた。

（嫌！ 音立てて吸らないで……！ グリグリ押し

あの人気触手凌辱AVGシリーズ最新作が小説で登場！
今度は病院で美少女退魔師が妖魔触手の餌食に！！

淫妖蟲凶 前編

～ 凌蝕病棟退魔録 ～ 姦禁蟲戮

いしほよしかず
小説 斐芝嘉和

たおの
挿絵 汰尾乃きのこ

小説
NOVEL

挿絵
ILLUSTRATION

原作
ORIGINAL

TinkerBell

「ん……うう？ あっ!? こ、これは……ッ!?」
意識を取り戻した香水水依は、己の身体が拘束されていることに気づいて着褪めた。

身に纏っているのは桜色のナース服、しかしタイトスカートは脱がされ、ショーツも剥ぎ取られて、股間を彩る淡い茂みが露わになっている。

細い革バンドで拘束された手足が括りつけられているのは、簡素だが頑丈な分婉台。

肘を曲げた両腕は頭の傍に、膝裏を掬われた両脚は股関節の近くまで広げられて、ガッチリ拘束されている。丸見えになって尻や秘裂を恥じ、必死に脚をくねらせても、鉄パイプに支えられて左右に張り出した脚乗せ台はビクともしない。

「ど、どうして私、こんな……」

焦げ茶色の長い髪を革張りの背もたれに広げつつ、怯えた瞳で周囲を巡らすと――

「気がついたかね？」

影から滲み出るように現れた、禿頭のデブブリとした白衣の男が、厚い唇に卑猥な笑みを浮かべた。

「……ッ!? あ、アナタは……」

「当医院の院長、本郷直毅だ。それより、キミはだれだね？ 偽看護婦さん」

粘着質の視線で水依の身体を舐めるように見つめ直し、剥き出しの秘裂や白く瑞々しい太股を確かめて満足したように頷く。視線を上げ、ナース服を破りそうなくらい大きく膨らんだ胸元に目を留めると、染みの浮いた頬を歪めていやらしい笑みを深める。

「あ……い、いやっ！ 見ないでくださいッ！」

なにを見られているのかようやく気づき、ポツと頬を赤らめてイヤイヤと首を振る水依。

羞恥と嫌悪に細い肩が強張り、円らな瞳は涙に濡れるのに、言葉遣いは丁寧だ。見るからにおぞましい妖魔に対しても「妖魔さん」と呼んでしまうくらい大人しく控え目で、傍がやきもきしてしまうほど

おっとりとした、真面目な美少女なのだ。

そんな水依をなおもジロジロと無慮慮に見つめ、厚い唇をさらにいやらしく歪める院長。

「もうひとりの偽ナースもなかなかの巨乳だったか、キミのほうがわずかに大きいかな？」

「え？ 私たちに、気づいていた……のですか？」

退魔屋本舗黒猫支店で見習い退魔師のようなことをしている水依は、退魔師としての先輩である白鳥深琴とともにこの病院へ潜入し、妖魔の気配を追っていた。病院関係者が妖魔を使役している可能性があったため、ふたりとも看護婦に化け、擬装のための護符を使っていたのだが――

「実に見事な結界だったね。侵入者がふたりというのはすぐに分かったが、その姿はなかなか捕らえられなかった。これは相当な術師がやってきたもんだと、かなり肝を冷やしたよ」

ガマガエルのような顔を歪めて戯けた院長が、白衣の裾を揺らしながら水依の隣に立った。

「この人が……主謀者？ 私、いきなり捕まってしまったの？ これからなにをされるのッ!?」

羞恥より恐怖に着褪め、頬を強張らせる水依。見習い退魔師といつても、正式なものではない妖魔絡みのある事件で深琴に助けられ、幼馴染みの橘木ヤマトとも再会して、ふたりが所属している退魔屋本舗黒猫支店に出入りするようになり、その流れで仕事を手伝うようになっただけだ。

だから、呪術は使えない。護符などを用意してもらい、使い方を教われれば、なんとか発動させられる。だが正式な訓練は基礎レベルでも受けていないから、本物の妖術師とやりあうことなど不可能だ。

「み、深琴ちゃんはッ!? 私と一緒に居た、もうひとり……」

「ほう？ あれはミコトというのか？」

思わず口走った水依に、本郷と名乗った院長はこ

とさら目を丸くし、それからニンマリと笑んだ。

「キミは素人同然だが、あちらはそこそこの術師だね。仔細蛛はたちまち焼き殺されてしまったし、跡も綺麗に消されていて、まったく追えなかったよ。だが、しかし……そうか、ミコトというのか。どんな字を書くのかな？ 上の名前は？」

「し、知りませんッ！」

自分の言葉がヒントを与えてしまったと気づき、唇を噛んで横を向く水依。

（バカ、バカ、私のバカッ！ 役立たずでただでもみんなにいつも迷惑をかけているのに、そのうえ、悪い人を助けるようなことを……）

これ以上情報を漏らすと、深琴たちに危険が及ぶかもしれない。だからもう、なんにも言うまいと心に決めて、脇に立っている院長を無視しようとする。

――が。

「知らないわけないだろう？」

「あ……や、やめてくださいっ！」

はち切れんばかりに膨らんだナース服の胸元を、武骨な手指に掴まれた。美しい丸みの弾力を確かめるようにムギユ、ムギユ、と揉まれ、柔肉を捏ね潰すように掌で押し回される。

「正直に言いなさい。さあ、さあ。キミが強情を張るようなら、もつとエッチなことをするよ」

「そ、そんな脅し……き、効きません、からっ！」

「ほほう？ 意外と愉しませてくれるね。果たしてどこまで耐えられるかな？」

頬を赤らめた水依にいやらしく笑み崩れた顔を寄せ、生臭い息を吹きかける院長。

「う……ッ!? く、ンう……ッ!?」

胸に乗せられた手指の動きが変わったとも思えないのに、不意に乳房が燃えるように熱くなった。硬い指先が喰い込むたび、乳房の芯に温かな気配が湧

き起る。圧力が弱まるとブラの裏地に擦れた乳肌
が火照り、そわそわとして、互いを揉み合う乳合に
淡い快感が閃いてしまう。

「な、なにを……あつ!? よ、妖気ッ!?」

「御名答。術師としては素人だが、妖魔に憑かれや
すい体質のようだね。気がよく通る。こうして揉み
ながら妖気を注ぎ込み続けられれば、キミのオッパイは
クリトリスにも勝る性感帯になるよ」

院長の言葉を裏付けるように、揉み歪められた水
依の乳房に快感が溜まる。内側から火照り、ブラや
ナース服に擦れている乳肌がそわそわとして、豊か
な丸みの尖端では敏感な乳首が勃起していく。

「や……やめて、やめてくださいっ!」

「やめて欲しかったら質問に答えなさい。ミコトと
いうのはどういう字を書くのかね? 上の名前はな
んだね? ちょっととしたヒントでもいいよ。あとは
私が調べるから」

「い、イヤです! 教えせんすっ!」

「どうしてそんな強情を張るのかなあ? 私が調べ
ても、キミのお友達には辿りつけないかもしれな
い。なしろ彼女はそこそこの術師だ。それなりの対策
は取っているはず」

卑猥な笑みを深めた院長が、桜色のナース服の上
から若々しい巨乳を揉み歪めつつ、横を向いて震え
る水依の赤く染まった耳朶に厚い唇を寄せ、ねっつ
りとした口調で囁く。

「だが、キミは素人だ。ただの素人ではなく、妖気
に敏感な素人だ。ほうら、ほうら……気持ちイイだ
ろう? 大きな大きなオッパイが、もう蕩けてしま
いそうだろうか?」

「う、く……んうう……ふう、はあ、うう……」

「どれだけキミが頑張っても、素人だから妖気の流
入は止めようがない。すると、どうなるか——この
オッパイ全体が、クリトリスよりも敏感になるんだ

よ。それでいいのかい?」

「か、構い、ませんっ! み、深琴ちゃんに、迷惑
は、かけられ……ませんっ!」

「ふふふ……分かってないなあ。キミのオッパイが
敏感になると、キミは私の奴隷になるんだよ」

「えっ!? な……なにを言ってる……そ、そんなもの
に、なる、わけが……んあつ!? ふ、ああつ!?」

ナース服越しに注ぎ込まれる妖気が不意に高まり、
揉み歪められた片乳に熱い快感が反響した。触れら
れていない乳房に肉悦はないが、気持ちよくなつて
いる相方に嫉妬したかのように、もどかしく耐えが
たい疼きが一気に膨れ上がる。

「どうだね? 耐えられるかね? そのうちキミは、
この快感が欲しくて欲しくてたまらなくなり、私に
縋って哀願するようになる——」

「な……なり、ませ……んう、ふう、くう……」

「私に縋り、私に媚びて、私の命令ならどんな恥ず
かしいことでも悦んでするようにになる——」

「ならない、ならない……絶対に……んっ!? うう、
んく……んっ、あ、あ、あああッ!?」

一際鮮烈な妖気を流し込まれ、片方の乳房だけが
蕩けそうなくらい気持ちよくなった。

ダメ、ダメ、このままでは——異様な乳悦に羞じ
らい喘ぎ、浅ましく堕ちた未来の自分を想像して、
絶望しかける水依。

だが、胸にかかっていた圧力が不意に消え、覆い
被さっていた院長の気配が遠退く。

（え? お、おしまい……?）

ホッと安堵しつつ、同時に物足りなさも感じて、
必死に閉じていた顔を恐る恐る開くと、

「え? あ……だ、ダメです、イヤです、そ、そこ
は……ッ!」

禿頭を汗にてからせた太り気味の院長は、左右に
大きく開かれてガツチリ固定された、水依の白い太

股の間に移動していた。羞じらい怯える少女の瞳を
いやらしい目つきで見返しつつ、おもむろにしゃが
み込んで恥ずかしい割れ目を覗き込む。

「あ……ああイヤッ! イヤイヤ、見ちゃダメ、見
ないでくださいっ!」

叫ぶ水依を無視し、あどけなさの残る若々しい秘
裂に相好を崩しながら、

「キミの使い方には、もうひとつある」
勝手に話し始める院長。

「これだけ気の通りやすい身体は、なかなか入手で
きない。修業した術師ならキミと同じくらい気がよ
く通るだろうが、その場合は護符やら術やら、いろ
いろ邪魔なものまでついてくるからな」

「な、なんの話ですかッ!? そ、そこを見えていな
い、話せないことなんですかッ!?」

「まあ、そう言えなくもない。キミの身体は、妖魔
の苗床として最適なのだよ」

「な……苗床って……ふあつ!? や、やめ……だ
ダメ、ダメダメ、触らないでええっ!」

叫ぶ声を無視し、院長の太く硬い指先が、水依の
柔らかな肉畝をくばあつと大きく割り開いた。

赤く潤んだ粘膜花弁があでやかに咲きこぼれ、天
井の灯りを浴びてぬらぬらと輝く。立ち上る牝香の
ねっとりとした甘酸っぱさに、ただでさえゆるい院
長の頬が崩壊しそうなくらい弛む。

「おやおや、ぐちよぐちよじやないか。こんなに濡
れるほどオッパイが気持ちよかったかね?」

「……ッ!」

「淫唇は小振りで、縁の髪もまだ浅い。クリトリス
は一丁前に勃起しているが……処女なのかね? 膣
穴が、ずいぶん小さい」

「う……うう……うううっ!」

挑発に乗って答えれば答えるほど、恥ずかしい思
いをさせられる——そう悟った水依は唇を噛み、溢

れ出しそうな声を懸命にこらえた。

「ま、負けない……負けたく、ない……どれほど頑張れるか分からないけど、私が頑張っていればきつと……うん、絶対に、深琴ちゃんやヤマトちゃんが助けて来てくれる！ だから、それまで……負けないように頑張るッ！」

「……ひあつ!!」

火照った淫唇に冷たく硬いものを感じ、己の股間をハッと見下ろす水依。

鉗子というのだろうか、先の曲がった細長いハサミのような金属製の道具に、繊細な粘膜炎を挟まれている。院長の武骨な指に操られたそれは、水依の秘処に淡い快感を産みつけながら横へ動いて、まだあどけない粘膜炎を限界まで引き伸ばす。

「い、痛い……痛いですッ！ そんなに引つ張つたら……ちぎれる、う、う……ッ！」

「大丈夫、そのうち気持ちよくなるから」
羞じらい震える太股に鉗子をテープで留め、伸びきった淫唇が戻らないようにする院長。

「う、う……ひあつ!! えっ!! ま、また？ いや、イヤです、やめてえっ！」

反対側の淫唇にも鉗子が噛まされ、同じように横へ引かれて、太股にテープで貼りつけられる。さらにひとつ、もうひとつ——左右の淫唇にそれぞれ四本、計八本の鉗子で、瑞々しく紅い肉ピラを大きく展翹されてしまう。

「ほら、これでよく見えるようになった。んん？ おかしいな、処女窟がヒクヒクしてるぞ？」

「い、いや……いやいや、見ないでください！」

「なら、お友達のフルネームを教えなさい」
「……ッ!? う、う……い、言わない……なにをされたって、言いません！」

「本当に？ なにをされても？」

水依の股間から頭を上げた院長が、ニマニマしながら念を押す。

「早く言ったほうがいいと思うがなあ……まあいい。これを使ってあげよう」

「え？ あ……ううっ!!」

恥ずかしい割れ目の縁、女体の中でもっとも敏感な肉豆に、冷たく硬いものが触れた。思わず声を上げてしまったが、痛くはない。淫唇を噛んでいる鉗子とは、まったく違う道具のようだ。

「これはチューブランプといって、点滴チューブなどを押し潰して流れを止める道具だ」

水依の秘裂に顔を寄せ、武骨な指でなにやら弄りながら説明する院長。

「お、押し潰す……って、え？ ま、まさか……やめてッ！ そんな……そこは……うっ!! く……ううっ!! ひ……ひ、ひいっ!!」

ヒタ、ヒタ、と軽く触れていた金属板の感触が、やがて敏感な肉豆から離れなくなり、次第に圧力を強め始めた。コの字形のフレームの中にネジで動かせる可動板があり、ひと巻きされるたびに固定板との幅が狭まって、水依の快楽局点をキリキリキリ締め上げていくのだ。

「や、め……てえっ！」

淫核に閃いていた快感が、鈍い痛みに変わっていく。震え喘いで悶えれば、金属製の小さな道具が上下左右にずれ、しっかりと噛み込まれた肉豆をちぎられそうに引つ張られてしまう。

「私としてもね、本当はこんなこと、したくないのだよ。妖魔の苗床にするか、性奴隷にするか……そっちのほうが愉しいに決まっているからね」

「だ、だ……ひっ!! はひ……ひぎっ!!」

ネジがまたひと巻き回され、繊細な淫核が押し潰されそうになった。もう快感は欠片もなく、ただただちぎれそうに痛いだけ。

「ひ、ひい……ひいっ！ は、外してッ！ お願いい、それ……外してええっ！ ンあつ!! あ……ああああああ……」

締まる一方だったネジが逆方向に二度ほど回され、耐えがたい激痛がほんの少しだけ和らいだ。

思わずほうつと安堵の吐息を漏らした水依は、
「……うっ!! あ……や、やだ……く、クリトリスが、あ、あ……熱いッ!!」

燃え出しそうなくらい熱くなる淫核に気づき、赤らむ頬を強張らせる。

止められていた血流が再開し、肉豆の中へどどどとと脈打ちながら流れ込んで、快楽神経を内側から刺激しているのだ。

強烈な熱さはやがて、もどかしい疼きに変わる。まだ冷たい金属の板に挟まれたままの小さな小さな肉豆が、痒くて痒くて、破裂してしまいそうなほど痒くなつて、

「く、う……ううっ!!」

わななく唇を噛み、頭の脇に拘束された手を固く握り締めて、恥ずかしい声を懸命にこらえる水依。

重圧から解き放たれた淫核が拍動するたび、鉗子によって大きく引き広げられた粘膜炎弁にも恥ずかしい蜜が滲むようだ。

わずかな空気の流れにさわ、さわ、と撫でられている秘裂が、淡い快感を発してもどかしく疼く。開いた膝の間にしやがみ込んでいた院長が白衣の裾を揺らして姿勢を変えれば、湧き上がる微風に淫唇を撫で回され、微弱な電流が割れ目に渦巻く。

「そろそろ教えてくれないかね？ キミのお友達のフルネームを」

「い……言え、ま、せん……ッ！」

「そうかね？ 仕方ないなあ」

「うっ!! あ……あぎ、あひ……あひいっ!!」

再びランプが締められ、膨れ上がる激痛が耐え

がたい疼きを追い払った。一秒、二秒——苦しみ悶える水依の様子をジッと観察していた院長が、ネジを軽く弛め、白くなった淫核に血流を戻す。

「ふあ、あ……あつ!? う、ふく……んく、うう、んぎい……ッ!」

二度目だからか、今度はいきなり、爆発しそうなくらいむず痒くなつた。米粒ほどの大きさしかないはずのクリトリスが、二倍、三倍、いや、一気に十倍ほどにまで膨れ上がっていくような感覚。

冷たく固い金属板に触れている肉豆の表皮に、青白い稲光に似た快感電流が走り回る。痛いような気持ちイイような、痛いの気持ちイイような——いや、痛いのが気持ちイイのか。

「どうだろう? そろそろ教えてくれるかな?」

「お……教え、ま……せんう……」

「ふむ、そうか……まあ、いいだろう。これはこれで嬉しいからな。さあ、もう一度行くよ」

「ひっ!? ひあ、ひ……いきい……ッ!」

またび淫核をキリキリと締め上げられ、分娩台に縛りつけられた細い身体を弓形に反らして、涙と脂汗を垂らしながら激痛に痙攣する水依。

この痛みは、すぐに消える。

そして代わりに、気絶しそうなくらい強烈なむず痒さが爆発する——。

そのとき、自分は耐えられるだろうか?

涙をこぼし媚笑を浮かべて、このいやらしい男に許しを乞うてしまうのではないか——。

陥落の予感に怯えた水依は、

(た、助けて……助けて深琴ちゃん……や、ヤマト、ちゃあんっ!)
 脇の裏に仲間の姿を思い浮かべ、胸中で必死に呼びかけた——。

* * *

事の起りは三日前——。

「ふひい……ただいま」
 「おとろし退治、終わりましたあ」

一仕事終えてクタクタになり、退魔屋本舗黒猫支店に戻った深琴と水依は、ガランとした事務所の様子に顔を見合させた。いつもなら所長の(夜)がのんびりと昼寝している窓辺も空っぽで、耳を澄ましてみても足音ひとつしない。

「……みんな二階にいるのかな?」

おっとりとした口調で言いながら天井に目を向ける水依に対し、

「外はまだ明るいのに?」

制服の胸元をはち切れんばかりに押し上げている巨乳とポニーテールにした長い赤毛を小気味よく揺らして振り返り、細い眉を怪訝そうに歪める深琴。

繁盛していかないとはいえ、不意の来客があるのかもしれないのだから、だれかひとり事務所に置いておくべきだろう。なのに全員いないというのは、いったいどういうことか——。

不審に思いつつ、居住スペースのある二階に登ると、深琴の妹・武の部屋に人の気配があつた。

「え? ま……まさかっ!?」

それまで呑気そうにしていた深琴の顔が、瞬く間に蒼褪める。妖魔との戦いで深く傷ついた武はいまだに体調が思わしくなく、ときどき床から起き上がれなくなることがあるのだ。命に別状はないということだったが、こんな時間にみな武の部屋に集まっているというのでは——。

「た、武っ!?」

最悪の事態を予感し、勢い込んで扉を開く深琴。六帖ほどの簡素な部屋、カーテンを閉めきつた薄暗がりの中、隅に置かれた机を囲んで一塊になつていた者たちが驚いたように振り返り——。

「あ、お帰り……」

とぼけた顔、とぼけた声で挨拶するヤマトの肩越しに、深琴は見た。

淡く輝く液晶ディスプレイに映し出された、裸の男女の姿を。

単なる裸ではない。

輪姦シーンだ。

画面中央で伸び上がっている白い女性の周囲に、スネ毛も露わな男たちが何人も何人も群がり、赤黒く照り光る肉棒をこれ見よがしに振り立てている。

「や……ヤマトちゃんっ!?」

深琴の肩越しに部屋の中を覗いた水依も、ディスプレイに映し出された卑猥な画像に気づいて頬を赤らめ、息を呑んで絶句した。

対するヤマトは、まるで緊張感がない。

「ん? どうしたんだ? なんてふたりとも、そんなところに突っ立つて……」

「——顕現せよ、雷光」

冷やかな目になつた深琴がぼそりと呟き、突き出した手の中に強力な退魔刀を顕した。

「え? な、なんで雷光……」

「問答無用ッ! チェエイトッ!」

気合一閃、長いポニーテールを靡かせながら鋭く一歩踏み込んだ深琴が、大上段に振りかぶつた退魔刀を唐竹割りに走らせる。

「うわあああつ!?」

驚いて叫んだヤマトは咄嗟に頭上で両手を打ち合わせ、間一髪白刃取りに成功した——が、

「あ……あぢつ!? 熱い熱いッ! 灼ける灼ける手が灼けるッ!」

半人半妖だから、霊気を放つ刃に密着した掌がちまちまぶすぶすと黒い煙を発生始める。額を割られなくても、このまま雷光に触れていればそれだけで大怪我になつてしまうだろう。

「な、な、なに考えてんだ、深琴ッ!?」

「それはこつちのセリフよッ! 私たちが命懸けで

妖魔退治をしているときに、よりもよって傷ついた武の部屋で、こ、こここんな……破廉恥な……不潔退散ッ！ 煩惱灼滅うッ！」

「ち……違うんだ、こ、これは……」

「問答無用で言っただしよっ！ さあ、その手を放しなさい。痛くないよう一撃で……はうん!?」

「ほうんっ！」

全力で刀を押し下げようとしていた深琴の乳房が、腕の間で不意に跳ねた。

もちろん、勝手に跳ねるわけがない。

豊かな丸みの下面からアッパークット気味に、小さな拳で打ち上げられたのだ。

しかも一度だけではない。

二度三度と、ほうん、ほうん、ほうんっ！

「やっ!? ちょ……やめて、鈴子！ いま大事なところなの、邪魔しないでッ！」

「頭に行くべき栄養が（ほうん！）こんなところに溜まっているから（ほうん！）おバカなことをするのです（ほうん！）黙って（ほうん！）話を（ほうん！）聞きましょう（ほうんほうんほうんっ！）」

「わ、分かったから、やめてっ！」

頬を赤らめて雷光を引き、何度も何度も突き上げられて恥ずかしい熱を帯び始めた乳房を両手で押さえながら、部屋の隅に飛び退く深琴。

涙目で睨む先には、大きな熊のぬいぐるみを胸に抱えた、ショートカットのふわふわとした桃色の髪が愛らしい、細身で小柄な美少女だ。

（うわぁ……可愛い！）

淫らかな映像を見たショックで硬直していた水依も、ようやく我に返り、戸口に半は隠れるようにして部屋の内部を改めて見直す。

椅子からずり落ちそうになっているヤマトの肩越し、机の端に行儀よくオスワリしている隻眼の黒猫は、この支店の所長である〈夜〉。見た目は単なる

黒猫だが、かなりの妖力を持つ猫又だ。

〈夜〉とは反対側、机の端に手をつけて響く面に、深琴の妹の武。妖魔との戦いで深手を負い、いままも身体のおちこちに呪符を貼りつけていて、見るからに痛ましい——が、いま苦しい顔をしているのは、傷が痛むからではないようだ。

「大丈夫。怖くないから入ってきて、水依」

「あ……は、はい……」

武に言われ、頬を赤らめたままおぼろげと入室して、邪魔にならないよう部屋の隅で縮こまる水依。

そんな様子に溜め息を吐いた武は、

「姉さんも、雷光をしまつて。いくらヤマトがデリカシーに欠けていても、私の部屋でエロ画像鑑賞なんてするわけないでしょ？」

疲れた様子で頭を振りつつ、混乱した場を納めにかかる。猫又の所長、半人半妖のヤマト、軽拳妄動気味の深琴という個性豊かなメンバーの中で、武は唯一の常識人なのだ。

「この子は、九重鈴子。旧黒猫支店のメンバーだった女性の娘で、かなりの使い手よ」

「あ、そうなのですか？ は、初めまして……」

手短に紹介された新顔に向け、おぼろげと頭を下げた水依は、ここでようやく、鈴子の右眼を覆う眼帯に気づいた。纏っている黒ゴスファッションと釣り合っているが、鈴子自身は天使のように愛らしいわけで、なんとも奇妙な印象だ。

一方、鈴子は——。

「むきいいっ！」

なぜかいきなり歯を剥き、部屋の隅に立ち竦んでいる水依に向かって飛びかかろうとした。咄嗟に武が襟首を掴まなければ、どうなっていたか。

「え？ エッ!?」

「有り得ないのです、許せないのですううっ！」

「す、済みませんッ！ 私、まだよく分からなくて、な、なにかまずいことを……」

「あー、いいのよ水依。鈴子はね、胸がペタンコなことをととても気に病んでいるの」

雷光を納めた深琴が、武とよく似た仕草でがっくりと肩を落とし、太い溜め息を漏らす。

「巨乳を見ると無闇に腹が立つらしくて、さっきのように会うたび会うたびボンボンボンと……」

「ただの脂肪の塊のクセに、生意気なのですッ！」

「ああもう、話がちつとも進まない！」

常に冷静な武が堪忍袋の緒を切らし、苛立ったように机を叩いた。

「所長！ 状況を説明して！」

「ニヤッ!? わ、分かったニヤ……」

すっかり気を吞まれ、耳をヘタツと伏せて、隻眼の黒猫が話し始める。

要約すると——半年ほど前から日本人女性が出演している輪姦動画がネットに投稿され始め、鈴子がいたヨーロッパでもいくつもの複製が確認された。素人の撮影ではあるが、女性自身が男たちを誘っているの、一見したところ犯罪性はない。

しかし、この動画には呪がかけられており、視聴者の精気を少しずつ吸い取っていた。健康被害が生じるほどではないから発覚するのが遅れたが、

「確認されているだけでもオリジナルは七十二ファイル、出演女性は三十四人もいるのです」

〈夜〉の言葉を受ける形で詳細を語る鈴子。

「それがネットにバラ撒かれ、次々と複製されて世界中に流通し、累計すれば億単位の視聴者がいたことになるのです」

「ほうんっ!?」

「なるほど……物凄いや量の精気がどこかに集められている、というわけね。で、鈴子がここにいてことは……」

41

「や、ちよ……あんっ！」

「そうなのです。出演女性の共通点を洗い出したところ、この近くにある、とある施設の名が浮かび上がってきたのです」

「やん、あん、あふ……」

「とある施設って……っていうか、どうしたの水依？ さつきから変な声を出して」

「それが、その……あん！ あん！ あんっ！」

「ぼんっ！ ぼんっ！ ぼんっ！」

机を囲んで液晶画面を覗き込んでいた水依の、深琴にひけを取らない巨乳が、なにかに突き上げられているように縦揺れしていた。

いや、なにかではない。

憎しみの籠もった、鈴子の小さな拳だ。

「ちよ……ちよつと鈴子、やめなさいっ！」

慌てて引き剥がそうとする深琴だが、鈴子はますます躍起になり、小さな頭で∞軌道を描きながらポンポンポンポン撃ちまくる。

「こんなもの、こんなもの……巨乳撃滅うっ!!」

「あふっ!? あ、あ、あああんっ！」

縦に弾んだ大きな乳房の尖端、敏感な乳首がブラの裏地に擦れてか、頬を赤らめ肩を震わせ、困惑顔で悩ましい声をこぼす水依。

「私にするならともかく、初対面の水依にまでそんな……水依も、イヤならイヤって言いなさい！」

「ご、ごめんなさい、でも、これ……は、恥ずかしいけど、イヤってほどでは……あん!? あ……やん、あん、ああんっ!!」

「ああもう、いい加減にするニヤッ！ ちつとも話が進まないのニヤあッ！」

——というわけで、翌日。

『とある施設』であるところの本郷医院に、深琴と水依は潜入した。

動画ファイルに呪を仕込み、しかも少しずつ精氣

を抜き取ることで発覚を遅らせようとしたその巧妙な手口から、敵はかなりの術師であろうと推測されたため、捜査には二名一組で当たる。

しかし、現在の黒猫支店で妖魔と対峙できるのはヤマト、深琴、水依、鈴子の四名だけ。傷が癒えていない武は戦力にならない。

このうち、ヤマトではどうにも目立ちすぎる。

「雷光で軽く撫でて傷を創って、入院させたら？」

「だめニヤ！ 出演女性のすべてに本郷医院への入院という共通項があるのだから、入院中に呪術が施されたと考えるべきニヤ。そこへいきなり半妖のヤマトを放り込んだら、こちらが相手の尻尾を掴む前に警戒され、姿をくまますかもしれないのニヤ」

「……っていうか、そもそも深琴の腕で『軽く撫でて』なんてできるのか？」

「入院しなきゃいけないほどの傷なんだから、半殺しどころか八割殺しになっちゃっても大丈夫かと思っただけ……」

「大丈夫じゃないっ！ 却下だ、却下！」

こうい経緯で、まずヤマトが外された。

残りは深琴、水依、鈴子の三人だが、鈴子が巨乳を目の敵にしている以上、ほかのどちらとも組めないわけで、結局いつも通りのペアだ。

「私たちならこうしてナースにも化けられるしね」ポディラインが浮き上がるほどピチッとした桜色のナース服にたわわな乳房を小気味よく弾ませつつ、いつも通り元氣な足取りで病院の廊下を進む深琴。

一方の水依はその半歩うしろを、頬を赤らめ俯き加減で、もじもじそわそわついでいく。

「んん？ どうしたの、水依？ 頬が紅いわよ」

「そ、それが、その……胸が、ちよつと……」

「え？ 私と同じサイズよね、そのナース服。ってことは……なに？ また大きくなったのっ!!」

「ちよ、ちよつと、深琴ちゃんってばッ！ 声が大

きい……あ！」

廊下の向こうに看護婦が現れたのを見て、慌てて傍の病室に飛び込むふたり。

一応、少しくらい見られても違和感を抱かれないよう擬装用の護符を身につけているが、挨拶以上の会話を交わせばたちまち見破られてしまう。敵は医者か看護婦か、とにかく病院関係者のようだから、接近しないに越したことはない。

それは同時に、情報は患者からしか聞き出せないということでもある。

なので……。

「こ、こんにちは。御加減いかがですか？」

飛び込んだばかりの病室を見直し、目を丸くして驚いている患者たちに気づいて、慌てて愛想を振り撒く深琴。隣で水依も頬を赤らめながら長い髪を揺らし、大きくペコッとお辞儀する。

「おや？ 新入りさんかい？」

「は……はい！ 研修中なので医療行為はできませんが、みなさんとお話して入院中の退屈を紛らわせることくらいはできるかと……」

「ああ、そりゃいいや。ちようど退屈していたところなんだ。なにもないけど、まあそこに座って」

——という具合で、病院関係者の目を盗みながらの情報収集は意外なほど簡単に進んだ。いろいろなところがはち切れんばかりにピチピチとした、若い美少女看護婦が相手だからか、患者たちの口は総じて軽かったのだ。

おかげで怪しい場所はすぐに分かった。もうすぐ取り壊されることになっているという、旧病棟だ。現在は倉庫代わりに使われているそうではほとんど人の出入りはなく、夜は完全に無人らしい。

人目がないのは好都合。

ナース服のまま病院の隅に潜み続け、夜が更けるのを待ってから、ふたりはそつと、真つ暗な旧病棟

に忍び込んだ——が、しかし。

「大丈夫よ、深琴ちゃん。なにもいないから」

懐中電灯を振りながら先を行く水依と、

「う、うう……ううう……」

その細い背にしがみつき、隠れるようにして、ピクピクおどつき従う深琴。

普段とまったく立場が逆だ。

患者たちから聞き込んだ噂は、たいていが「旧病棟に幽霊が出る」というもので——そして深琴は、幽霊が大の苦手なのだ。

（まあ、苦手なんだから仕方ないわよね。深琴ちゃんの代わりに、私がしっかりしないと……）

怯える深琴は微笑ましいし、普段はみんなの足を引っ張ってばかりの自分が役に立てているようなので、水依の頬はつついっし弛む。

——が、水依も別に、ことさら気が強いわけではない。むしろ臆病なほうなので、

「ひ、ひああっ!？」

「えっ?! な、なにッ!？」

耳元で不意に叫ばれれば一緒になって腰を抜かし、互いに抱き合っ座り込んでしまう。

「な、なにが見えたの、深琴ちゃんッ!？」

「ししし、し、白いものが……いま、そこ……その入口の影に、ふわっと……ゆ、ゆゆ、ゆゆゆ……」

深琴との差は、立ち直りの速さくらいか。

（あ……これはまた、深琴ちゃんの見聞違いね）

素早く判断し、バクバクしている心臓を深呼吸吸して落ち着けて、

「——妖気は感じる?」

懐中電灯を巡らしながら慎重に立ち上がる。

「か、感じない……けどけど、幽霊ってそういうものなのよ、たぶん! だって薄いでしょ? 透け透けでしょ? だから妖気も薄いよ、妖気が感じられなくてもそこにいるのよ、絶対!」

使い物にならない深琴を置いて、一応用心しながら傍の入口を覗き込んだ水依は、

「大丈夫、これはカーテンよ。幽霊じゃないわ」

裂けて振れた布切れを掴み、優しく微笑んだ。

患者たちの噂は、たいていが又聞きだった。それもどうやら、医師や看護婦から聞かされたらしい。

（たぶん、旧病棟に人を寄せつけなかったための嘘……それに、夜も武ちゃんも鈴子ちゃんも、幽霊が出そうだとはい言わなかったし……幽霊なんていないない、いるわけがない……のよ……）

正直に言えば、水依だって怖い。

しかし、深琴がこんな状態では、自分が頑張るしかないだろう。

「ほら、立って深琴ちゃん。大丈夫、幽霊はいないわ。気を取り直して、この部屋を調べましょう」

「う、うん……ご、ごめん、水依……先に入って。私私……やっぱり、無理……」

「ホントにもう、しょうがないなあ」

苦笑しながらカーテンを潜り、真つ暗な部屋にそろそろと入ってみると——そこはロッカールームだった。縦長のスチールロッカーがひしめくように立ち並び、視界を塞がれて、奥まで見通せない。

懐中電灯を天井に向けて部屋の大きさを探ると、左右に大きく広がっているようだ。取り敢えず奥まで進み、ロッカーに隠れた部分を確認しなければ、調べたことにならないだろう——と。

「……水依。さがって」

急に声を低めた深琴が、腕を出して水依を制した。部屋の奥に油断のない瞳を向けつつ、スッと一歩。

「な、なに……?」

「妖気よ。微かで、まったく動いていないから、妖魔じゃなくて呪符かなにかだろうけど」

一瞬で退魔師の顔に戻った深琴が、小声で話しながら歩を進める。苦手なのは実体のない幽霊だけで、

それ以外が相手ならそこそこの術師なのだ。

「困かもしれない。うしろの警戒をお願い」

「う、うん……」

「念のため、呪符を用意しておいて。でも、なにかあったらまず叫ぶ……ぎゃあああっ!？」

「ぎゃああああっ!？」

突如湧き起こった魂切る悲鳴に、つられて飛び上がった絶叫する水依。

ガタガタ、ガタタツ!

傍らで凄まじい騒音が鳴り響き、屏風のように視界を塞いでいたロッカーがドミノ倒しの要領で、部屋の向こう側まで続けざまに倒れていく。

「どど、どうしたの、深琴ちゃんッ!？」

「あ……あれ、あれ……ゆ、ゆ、幽霊ッ!」

板金製のロッカーに体当たりしたのか、歪んだ細長い扉に半ば挟まりながら小さく縮んだ深琴が、天井に向けて震える指を伸ばした。

ハッとした水依が慌てて懐中電灯を振り向けると

「ふわり。」

確かに、なにか白いものが揺れた。

だがもちろん、幽霊ではない。

このロッカールームは男女共用だったのか、それとも診察室を転用したものなのか、懐中電灯が作る白い楕円の中には天井から吊り下げられたカーテンレールがあった。そこに、薄布のように稠密な蜘蛛の巣が逆三角形に細長く垂れ下がっており、掻き回された空気に煽られて微かに揺れたのだ。

「大丈夫よ、深琴ちゃん。ただの蜘蛛の巣よ」

「ほ、ホント……? ホントにホント?」

「本当だってば。ほら、見て」

苦笑混じりの水依の声に促され、恐る恐る顔を上げて顔を上げた深琴は——見た。

微笑む水依のうしろ、天井に大きく開いた闇の中から、ニューッと伸び出してくる蟲の細長い脚を。

「け、顕現せよ、雷光ッ！」
慌てて叫ぶ深琴だが、遅い。

「え？ あ……きや、きやああつ？」
先には鋭い二股の鉤爪を、節々には怖ろしい棘をいくつも生やした、だんだら模様細長い何本もの脚が、無防備に突つ立っていた水依を背後からガチツと抱き捕らえる。驚愕し、掠れた悲鳴を上げる偽ナースを、天井に開いた真つ暗な穴へ瞬間に引き込んでいく。

「チエイイツ！」

跳ね起きた深琴が振るつた切つ先はカーテンレールをすつぱりと断ち割り、天井にも真一文字の深い傷を刻んだが、ただそれだけ。

先ほどまで見えていた穴は、呪術によって空間自体に穿たれた、異次元の入口だったのだ。

「し、しまった……ッ！ 水依、水依……ごめん、水依ッ！ 私のせいで……」

歯噛みし、頰垂れ、己の太股を拳で殴りつけた深琴は——痕跡を消す呪符をバラ撒き、すぐにその場から立ち去った。

そして——。

* * *

分娩台上に拘束された姿で意識を取り戻してから、いったいどれだけの時間が経ったのか——。

「う……ふ、ああ……うう、ああ……ふうう」

赤らむ頬を涙に濡らし、細い肩を震わせながら、乱れた吐息を力なく繰り返す水依。

ナース服をはだけられ、ブラを首側にずらされた胸の上で、剥き出しの乳房がゆっくり大きく上下する。瑞々しい乳肌は桜色に火照り、丸みの尖端を彩る乳首や乳暈は艶めかしいピンク色に染まって、胎内に膨れ上がった肉悦が凝縮しているかのように、弾けんばかりに勃起している。

クリトリスにさされていたクランプ拷問を、左右の

乳首にも施されたのだ。何回目なのか分からなくなるほど何度も繰り返されて、乳首も淫核も耐えたいむず痒さをたくわえたまま限界以上に勃起してしまった。いまはクランプこそ外されているが、淫唇の端を摘んだ鉤爪はそのまま、紅く繊細な粘膜に浮いた恥ずかしい粘液が、白々としたスポットライトを浴びていやらしくぬめり輝いている。

「可愛い顔して、なかなか強情なお嬢さんだ」
見下ろす本郷院長は、呆れ加減の言葉とほうらほらに、満足そうに微笑んでいた。ガマガエルのような顔を歓喜に歪め、厚い唇を無意識に舐める。

「これほど丈夫なら……それに、このお嬢さんが行方不明になっても、だれも騒がぬだろうしな」

「な、なにを、言つて……」

「退魔師なんでもものは、所詮は裏稼業だ。妖魔？ ハハ、だれがそんなものを信じるかね？」

鼻で笑われ、唇を噛む水依。

なるほど、確かにこの男の言う通りだ。

「現在の常識に照らせば、キミたち退魔師はおかしな病院に潜入して行方不明になりました。キミがご飯に大騒ぎしても、だれもまともには取り合わないだろう。そこが、退院させないと大騒ぎになってしまふ入院患者との大きな違いだ」

「で、でも……深琴ちゃん……」

「キミにどれだけ仲間がいても同じことだ。公の助けを借りられないのだからキミたちだけでなんとかするしかない。ならば私も、キミたちだけをどうにかすればいい」

言いながら立ち上がった院長が、せかせかとした動きで一旦水依の視界から消えた。部屋の隅、暗くて見えない壁際で、ガラス製のなにかをカチ、カチと触れ合わせ始める。

「ど、どうにかつて……」

「端的に言えば、消すつてことだ……うむ、これにしよう……キミを助けに来るであろう仲間も、準備万端整えて手際よく返り討ちにしてしまえば……おこれこれ……なんの問題もない」

「そ、そんなに簡単に、返り討ちなんて……」
反論しかけた水依の言葉が、途中で掠れ消えた。

闇から戻ってきた院長の左右の手に、それぞれひとつずつ、中型の広口瓶が握られており、その中に色鮮やかな物体がねじくれた格好で詰め込まれていて、なにやらおぞましく蠢いていたからだ。

「そ……そ、それ……まさか、妖魔ッ！」

「分かるかね？ まあ、腕は素人でも退魔師と一緒にいたのだから、見たことくらいはあるだろうな」

肉のだぶついた頬を得意気に輝かせた院長が、サイドテーブルを引き寄せ、その上に妖魔の詰まったガラス瓶を置いた。白衣のポケットからも小振りな瓶や試験管を取り出し、怯える水依に見せつけるように、ひとつずつ丁寧に並べていく。

「釈迦しやくわに説法かもしれないが、まあ一応説明してこう。精気を栄養源としている妖魔は、たいいていのものが人間の牝の胎内に卵を産みつけて増殖する。人間が一番、精気の密度が高いからね」

慣れた口調で喋りながら、並べた瓶や試験管を摘んで持ち上げ、なにやら考えているように首を捻り、また降ろして——。

その様子を強張った顔で見つめる水依は、容器の中に閉じ込められている不気味な造形の妖しい生き物を見るたびに息を呑み、首を竦めて、怯えをますます募らせていく。

「ただ、妖魔の卵を産みつけられた人間は無事では済まない。最悪の場合、命を落としてしまうことさえあるから、入院患者で遊ぶことはできなかった」

「あ……遊ぶつて……」

「実験だよ、実験。妖魔の産卵定着実験だ」

恥ずかしさを忘れて蒼褪める水依に、本郷院長がニンマリと笑いかける。

「妖魔に襲われても卵を産みつけられない者が、わずかにだがいる。どうやら、人間には卵の定着を拒む能力があるらしいんだ」

「……え？」

それは初耳だ。

深琴たち退魔師なら常識なのかもしれないが、基礎すら学んでいない水依はまったく知らなかった。

（もしそれが本当なら、深琴ちゃんも助けに来てくれるまで、無事でいられるかも……）

一条の光明を見出し、緊張がわずかに弛む。

そんな少女にニンマリと笑いかけて、院長がひとつの瓶を取り上げ、蓋を開けた。

「私の仮説では、それは思念力だ。イヤだイヤだと強く思えば胎内のホルモンバランスが変化し、卵の定着を妨げる——はずだ」

と、瓶の中に細長いピンセットを挿し込み、人差し指くらいの太さ長さの、黒地に蛍光色の毒々しい模様の、コブコブとした芋蟲を摘み出す。

「ひ……ひ……ひ……」

一目見た途端、水依の口から悲鳴が漏れた。

尖端の丸い頭部に、艶々光る大きな複眼。

先にもうしろにも細長い二対の触手が伸びているため、頭がふたつあるようだ。しきりに伸びたり丸まったりする腹には木の芽のように小さく尖った脚が幾対も並び、足場を求めてせかせかせぞわぞわ、波打ちながら蠢いている。

「いまからこれを、キミの恥ずかしい割れ目に置く。これは卵を産みつけるためにキミの膣穴へ潜り込み、子宮まで這い進む。私の仮説に拠れば、そのときキミが本気でイヤだイヤだと強く強く思い続けていれば、これの卵は定着しない」

「や、あ、あああつ！ ダメ、イヤ……やめて！」

「そうそう、そうして嫌がつていれば大丈夫。ちょっと気持ち悪いだけで、なんの害もない」

「う、嘘……嘘……ひあつ?! う、ああつ?!」

鉗子によってあられもなく展翹された粘膜炎弁に、小さな痛みが弾け、あるかなきかの重みが乗った。最初は小さな点として感じられた重みが、すぐに細長く伸びる。そしてモゾモゾと波打ち、ゆっくりゆつくり這い進む——。

「ひっ?! あ……ああうっ?! は、入ってくる? あ、ああイヤ、ダメダメ、入ってくるうっ?!」

人差し指くらいの太さの硬い丸みが処女膣穴に押し当てられ、上下左右にクニクニと動いた。蒼褪めた顔を必死に上げても、桜色に火照って重々しく弾み揺れる大きな乳房が邪魔になつて、己の股間は見えない——が。

「や、あ、あううっ?! く、ふ……ンううっ!」

しきりに揺れる小さな妖魔の硬い頭に繊細な処女粘膜炎がしごきまくられ、四方八方に押し歪められる。恥ずかしい蜜に濡れた粘膜炎が、列を成してぞわぞわと蠢く小さな脚に掴まれ、掻かれ、放される。

頭と尻に生えた二対の触手は、あまりに細くて柔らかなのか、粘膜炎に触れても察知できない。しかしきつと、ゆらゆらと揺られて、水依の胎内を執拗にまさぐっているだろう。

「逆に言えば、だ」

同じ瓶からもう一匹の芋蟲を摘み出し、いやらしい笑い崩れた院長が続ける。

「もしキミが、これ気持ちいい、とか思ってしまったら、妖魔の卵は簡単に産みつけられてしまう。キミは妖魔の苗床になる……分かるかね?」

「わ、分かります、分かりますから……ああダメ、ダメダメ、お願いやめて、二匹も……ダメえ!」
分娩台に縛りつけられた細い身体を必死にくねらせ、はだけられた胸の上で桜色に火照る乳房を重々

しく跳ね揺らして、掠れた悲鳴を上げる水依。

だが、その秘製には二匹目の芋蟲が乗せられる。

それが膣穴に潜り込むのを待たず、鉗子に端を摘まれて大きく引き伸ばされ、紅くぬらぬらと咲きこぼれた繊細な粘膜炎弁に三匹目、四匹目が次々と乗せられて——。

「ふっ?! く……く……ふ、ンう……ンぎっ! ひあ、あ……ああううう……ッ!」

先を争うように潜り込んでくる細長い芋蟲に、水依の処女膣穴がムニムニとこじ開けられた。伸縮する体節に薄つきのヒダヒダがしごきまくられ、蠢く小さな脚に掻き回される。

そのたびに、男を知らぬ膣洞に火花のような快感が閃いては消える。痛いような、むず痒いような生まれ初めて感じる種類の、言い表すのが難しい微妙な感覚だ。

（い、痛いんじゃない、痒いのもない……これは気持ち悪いの、気持ち悪いって感覚なのッ!）

わななく唇を噛み、溢れ出す喘ぎ声を懸命に抑えて、水依は己の胸に言い聞かせる。

必死にそうしてないと、恥ずかしい声が漏れてしまいうだ。理性はまだ認めていないが、身体は明らかに、胎内で蠢く妖魔たちを「気持ちいい」と感じ始めている。

いやらしい院長の言葉を信じたわけではないが、もし本当に、イヤだイヤだと思いつけているだけで妖魔の卵を産みつけられないのなら——。

（感じちゃ、ダメ……き、気持ちよくなっちゃ……ダメ……妖魔さんは、気持ち悪いの……これは、この感覚は、気持ち、よく、ないの……ッ!）

ひしめく芋蟲たちに掻き回された膣穴からじわり、じわり、と淡い快感が溢れ出してくるが、額に脂汗を浮かべた水依は一生懸命否定する。
「ふ、く……ンう……はあ、うう……ンくうっ!」

喉の奥から迫り上がって来る恥ずかしい吐息を必死に抑え、脚乗せ台に乗せられた白く伸びやかな脚や頭の左右に拘束されたなやかな腕をもどかしそうにくねらせながら、懸命に耐える。

「そうだ、頑張れ。気持ちよくなったらおしまいだぞ。妖魔の苗床になつてしまおうぞ」

愉しそうに煽つた院長が、大型の広口瓶を取り上げ、蓋を開けた。そのまま水依の胸に寄せて――。

「うあつ!! え? え……あひいっ!!」

悶える動きに合わせてゆさゆさと揺れていた白い巨乳に妖魔の入った瓶を被せられ、喉を引き攀らせながら掠れた悲鳴を上げる水依。

――チクツッ! チクツクツッ!

火照る乳肌小さな痛みがいくつもいくつも突き刺さる。瓶がゆっくり上げられ、中に入っていたカラフルな蟲たちが雪崩を打ってこぼれ出し、弾み揺れる左右の乳房に散らばって、棘つきの細い脚を広げてひしとしがみつく。

一匹一匹は、小さい。

平らな甲羅は幅数センチ、脚を広げても十センチになるかならないか。

色鮮やかなカニのようなそれはしかし、何十四匹もいるのだ。頭部にいくつもの複眼を光らせつつ、群れで協力して弾む乳房を覆いかくそうとしているかのように、美しい丸み全体に広がって柔らかな乳肌に鉤爪を突き立て、ヒシとしがみつく。

「い、痛い……痛い痛い、はひいっ!! やだやだ、こ、こんなにたくさん妖魔さん……い、い……イヤああつ! 取つて取つて、取つてええつ!!」

乳肌のあちこちに閃く小さな痛みと、左右の膨らみを覆い尽くした妖しく毒々しい甲羅の色合いに、水依はパニックを起こした。鼻にかかった甘い涙声で哀願し、分婉台に拘束された細い身体を駄々っ子のように揺する。剥き身の巨乳は当然、いままです

上に上下左右へ跳ね躍るが、振り落とされまいとした妖魔たちは余計に強くしがみつくだだけだ。「よしよし、いい仔だ。泣かない泣かない」

笑つた院長が赤子をあやすような口調で言い、振り乱された水依の長く艶やかな髪を優しい手つきで撫で整えた。涙に濡れた瞳を覗き込み、ゆっくり顔を近づけて――。

「東南アジアなどに棲息するトゲゲモに似ているが、これも立派な妖魔だ。ただ、ほかの妖魔と違い、乳液に含まれる精気しか摂らぬ」

それを聞けば水依の怯えが消えるかのように、囁んで含めるように説明する。

「こうして乳房に必死にしがみつくなのは、そのせいだ。肌に刺さる爪が少々痛いだろうが、大丈夫、すぐに気持ちよくなる。この爪には淫毒が滲んでいるからね。キミのこの、大きな大きなオツパイは、やがて燃えるような快感の塊になるんだ」

「え……あつ!! やだやだ嘘嘘……そ、そんなの、ダメええつ!!」

気持ちよくなれば、腔穴に潜り込んだ芋蟲型の妖魔たちに卵を産みつけられてしまう。妖魔の苗床になつてしまふ――。

焦つて足掻いた水依だが、それは逆効果だ。

「そう。そうしてオツパイを揺らせば揺らすほど、淫毒を滲ませた爪がしつかりと刺さる。それだけ早く気持ちよくなれるわけだ」

「ひっ!! ひ、ひいっ!!」

墮落の予感に息を呑み、痙攣性の悲鳴を上げて頬を赤らめる水依。
その、仰向いた胸の上で――左右の大きな丸みがカアツと熱くなった。しっとり汗ばんだ乳肌の裏側に、赤々とした熾火が燃えているようだ。妖魔たちの小さな爪から注ぎ込まれた淫毒が効果を発揮し始めたのだらう。

（あ、熱い……熱い熱い、燃えるうっ! と、熔ける……ああ、ああ……胸が……胸があつ!!）

ドクンツッ! ドクンツッ! ドクンツッ!

クランプに締め上げられたクリトリスや乳首と同じように、火照る乳房全体が流れ込む血流に内側から突き揺すられ、重々しく拍動し始めた。

米粒大の淫核や小指の先にも満たない乳首ではない。たわわに実つた、贅沢すぎる巨乳だ。

「ふう……ッ!! ン……んう、ンぎいっ!!」

湧き起こつたもどかしさは小さな小さな肉豆の比ではなく、どんなに歯を喰ひ縛つてもこらえきれない。頭の脇に拘束された腕の先で小さな拳を握り締め、大きく左右に開かれた脚の先で細い爪先をキュウ、キュウ、と丸めても、ふたつの丸みは爆発しそうなくらい強烈に疼く。

巨乳を覆い尽くした妖魔の群れの下で、淫汗に濡れた乳肌が茹だつたように赤らむ。妖魔の群れから突き出ている真つ赤な乳首が、みるみるうちにムクムクと、限界以上に勃起する。

「どうだね? 私の言つた通り、すぐに気持ちよくなつただらう?」

「き、気持ちよく、なんて……ないですつ!! こ、こんなの……こんなの……うう、ふ……くう……」

強がりではなく、本心だ。

淫毒によつて強制的に発情させられてしまつた左右の巨乳は、ただただ疼いてもどかしいだけ。それがあるにも強烈だから、肉悦などを感じる余裕は一切ない。あと少し、ほんの少し――軽く突かれるか採まれるかすれば瞬く間に気持ちよくなつてしまふような気もするが、いまはただただ苦しいだけ。

しかし、腔穴は違う。

いやらしく伸縮する人差し指くらいの芋蟲たちの、木の芽のような小さな脚に蹂躪された処女粘膜は、乳房の疼きが高まるにつれて敏感さを増した。コブ



コブとした体節が伸び、縮むたび、蟲の冷たい背にしごかれたヒダヒダに悦びの電流が走る。列を成した小さな脚が滲む愛液をクチュクチュと掻き回せば、火花のような快感が次々と閃き、ヘソの裏側に温かな感覚が広がってしまう。

「耐えたい胸の疼きと、肉の悦びに甘く痺れて蕩けていく腔穴――」。

「へ、変に、な……るううっ！ 私の身体、変になっちゃう……ううっ！」

淫悦と苦痛の板挟みに遭い、水依は涙をこぼしながら喘いだ。しかもタチが悪いことに、快感のほうが少しづつ勝っていく。

「感じたらダメ、気持ちよくなったら、ダメ……：妖魔さんの卵が、妖魔さんに、た、卵を……産みつけられ、ちゃ……ううう……ッ！」

先ほどまでは嘘か本当か分からないと思っていた院長の言葉に、必死に縋りつく水依。

胸の辛さと腔の心地よさがせめぎ合っているせいで意識が千々に乱れ、思考力がなくなっていく。ただ、妖魔の苗床にされるのだけはイヤだ、ダメだと、本能的な嫌悪感だけはまだしつかり残っている。

「そこへ――」。

「ふふふ……苦しいかね。苦しいだろうなあ」

厚い唇を嬉しそうに歪めた院長が、もうひとつの大きな広口瓶を取り上げた。脂汗を浮かべて呻いている水依の顔の前にスツと差し出し、

「これなんかどうだろう？」

親しい者にネクタイが合っているかどうかを見てもらっているような気軽さで、静かに訊く。

「うう？ な、なにが……ひっ!? ひああ……！」

ついついつられて目を向けた水依は、大きなガラス瓶の中でのたうっている色鮮やかな妖魔を見て、引き撃った悲鳴を上げた。

熱帯の海にいるウミウシに似た、カラフルな色合

いの軟体動物。ガラスに押しつけられてのたうっているタコのように長い脚には、吸盤の代わりに硬そうな肉瘤がいくつもいくつも連なっている。「キミは見た目に反してなかなか丈夫なようだから、苦しいだけではどうも効果がないようだ」

「そ、そんな、こと……ない、ですうっ！」

「そこで、これだ。この妖魔は、絶頂時の牝の精気を持って好む警沢者でね。このイボつきの触手で穴という穴を抉りまくり、乳房や尻を揉みまくって、獲物がよがり死ぬまで何度も何度もイかせまくる」

不気味な妖魔のたうっている大きな瓶を顔の横まで退いて、院長がねっとり笑った。

「これを使って気持ちよくしてあげるから、仲間の名前を教えなさい」

「そ……それは……」

「おおっと、いますぐでなくてもいいよ。このモコモコとした触手で腔や尻穴を抉られ、よがり狂いながら、ゆつくり考えてくれたまえ」

「ひっ!? ひ、いい……ッ!?」

息を呑み、ひきつけを起こしたような悲鳴を漏らすと、淫毒に侵されてもどかしく疼く乳房がゆさゆさと揺れ、群がった妖魔たちの小さな爪がさらに強く、さらに深く、乳肌を喰い込む。

大きく開いた太股を閉じようとして必死にもがけば、鋭く捻れる腔穴の奥、ひしめく芋蟲たちが狂ったように暴れ始める。複雑に絡まり合いながら伸縮し、細かな脚を滅茶苦茶に小刻みに動かして、愛液に潤む処女粘膜を掻き回して、稲光のような快感を何度も何度も閃かせる。

「まあ、あまりのんびりしていると、いきまわってよがり死んでしまうだろうが……キミのような可愛い子を死なせてしまうのは残念だが、情報を聞き出せないのなら仕方ない」

「い、い……いや、あ、あああつ！ やめてください

いお願いです、そんな妖魔さん……そんな妖魔さん……わ、私……私……し、死んじやいますッ！」

「いまでさえ、胸の疼きと腔穴の悦びで身も心も引き裂かれそうなのに、あんなおぞましい触手で敏感な穴を穿られたら――」。

恥辱を予期して大粒の涙をポロポロこぼす美少女に、院長はわざとらしい苦笑を見せた。

「だつて仕方ないじゃないか。キミが仲間の情報をちつとも教えてくれないんだから」

「そう言いながら、妖魔の入った瓶の蓋に手をかける。怯える水依に見せつけるように、ゆつくり、ゆつくり、回し始める。」

「でもまあ、安心したまえ。ちつとも苦しくなんかいい。いやそれどころか、おかしくなりそうなくらい気持ちいいはずだ」

「い……言います、言いますッ！ み、深琴ちゃん、上の名前を……い、言いますううっ！」

苦痛と肉悦と恥辱の予感に追い詰められ、とうとう叫んでしまう水依。

「だがもちろん、仲間を売る気はない。」

「う、上の名前は、か、香山……ですつ！ 香山に深い琴で、香山深琴ちゃんですうっ！」

自分の苗字と繋げて嘘を吐き、この場をしのぐと考えたのだ。

「ほう、そうか。香山深琴ちゃんね」

頷いた院長は瓶の蓋を手早く閉め直し、サイドテーブルに戻した。

「よしよし、いい仔だ。よく教えてくれたね。最初からそうして素直に教えてくれれば、私もこんなことはしなかったんだよ」

「恩着せがましく言いながら、水依の足先を巡って大きく左右に開かれた膝の間に戻る。」

「な……なにを……む、妖魔さんはッ!? 妖魔さんを取ってくれるんじや……」



ルキウス・
ロマノフ

内縁の夫
……いや
本当の夫かな？

……ツ!!

貴様ツ!!

何故それをっ!!

冷徹な女帝に変容が!!

驚きましたよ

監獄艦船3

熱砂の洗脳航路 PRISON BATTLE SHIP 3
BRAINWASHING ROUTE OF BOILING SAND

episode
06

魔女親子の狙い

くすのき
漫画 楠木りん
原作 Anime LILITH



ネオ・テラーズの
四大財閥の
ロマノフ家の
当主が……

ネオ・テラーズと
敵対する女帝の
夫だったとは……

ルキウス・
ロマノフは……

俺が
ネオ・テラーズ時代にも
情報を探した
ことがあったが
何も出てこなかった

それもそのはず
彼は婿養子として
ロマノフ家に入り

それまでの経歴を
消されていたようだ

提督とルキウスは
同じ国の出身

すると
興味深い事が
わかりましたよ

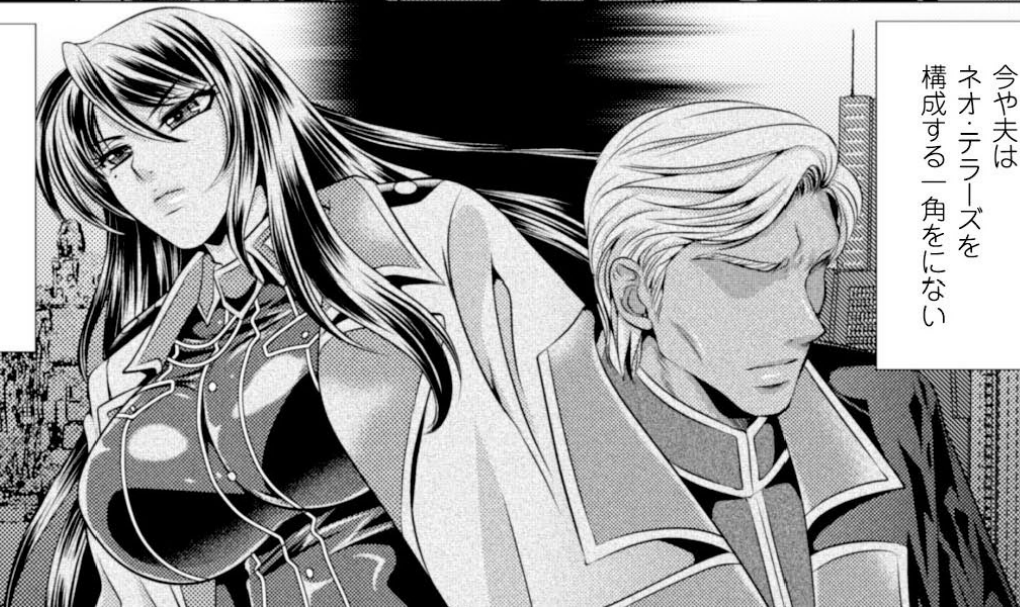
それも
ネオ・テラーズの
攻撃によって
滅ぼされた国であると
いうことも……!

ここまで
ピースが揃えば
聞くまでも
ない——



今や夫は
ネオテラーズを
構成する一角をにない

妻はネオテラーズに
反旗を翻す
存在になっている



内外から
ネオニラースを攻め
その全権を掌握して
復讐を果たすそして
祖国を復興する

これが女帝の
最終目的!!

本来なら
俺は殺されて
いただろう

……まで
知られた
からには……

からには？

だが
洗脳下にある
お前には
できない!!

心配ご無用
秘密にしますよ

そのかわり……

ブルブル

……うっ
……うっ

くう……!

ズッ



メス豚娼婦
なんだろ!?

二本刺しちゃう
でうって
ねえよな!?



ひい!
はひい!!

おおおっ
オマコとおひり
りよ
両方にひいっ!

おらっ!
しっかり締めるよ!



んおおっ!!
当たり前
れひゅ!

ぐっ!
ひいい...!

ふ二人とも
すぐにイカせて
みせまひゅん!
んうっ!!



なら
イかせてくれよ

メス豚
娼婦さんよ!

かはっ…
ああ!

かっ
感じてなど…
いまひえん!

ちやんと…お
締めてりゆう!

感じてねえで
もっと
締め付けろよ!

いやあ
足りねえ!

こいつを
試してみるか

カキヤ



そんな…!



何…!?
そこ…!
違あ…っ!!

違わねえよ
こいつは
尿道用パイプだ

カキヤ

こっこれえ
ピリピリ…!!

ははは!
どうだ!

尿道を刺激されて
気持ちいいだろ!?

やめ…
んぎいッ

やめな
ひゃい!

ふん
お前がメス豚娼婦の
役割を果たして
ないからだろお?

ふひい!

いいっぱい
締めましゅから
ややめ…!!

いいぜコレ!
マコノ締めまりが
良くなったぜ!
キラ中尉ッ

こっちの
ケツマコも
ぎゅうぎゅう
締めてきやがる!

思春期な アダム

第14話

EVIL EYES

熾結界ッ!!

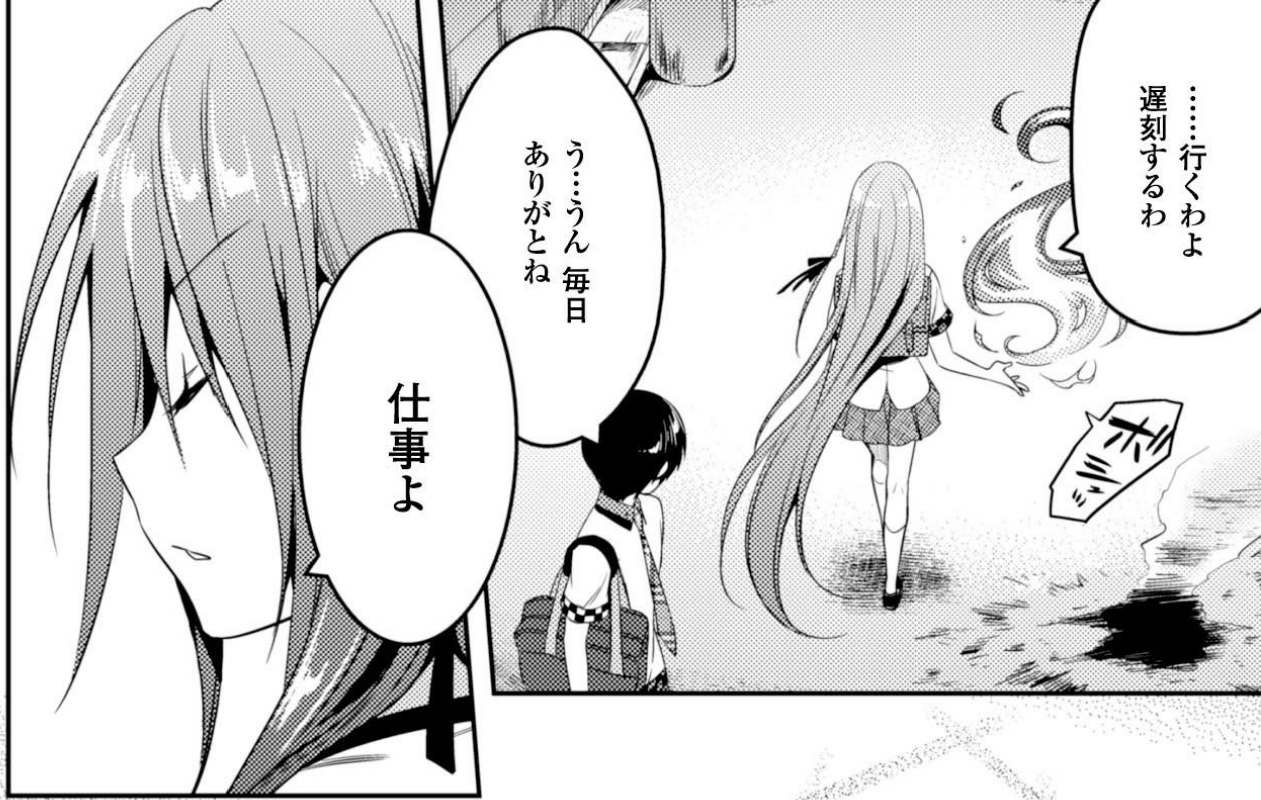


天海雪乃

原作 さかき 傘

web版コミックヴァルキリーでも連載中!
[http://www.comic-Valkyrie.com/](http://www.comic- Valkyrie.com/)

ただいま各種ダウンロードサイトにて
二次元ぶち文庫「思春期なアダム」外伝 好評配信中!



……行くわよ
遅刻するわ

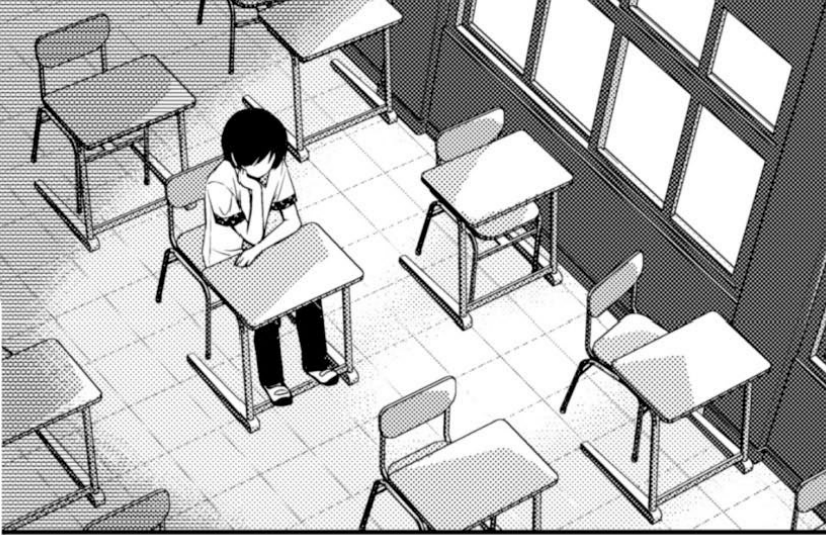
う……うん 毎日
ありがとね

仕事よ

……こんな力じゃ
まだ全然足りない……



放課後



前号までのあらすじ

FeTUSとの戦いに備えて、修行に励むエンジユ。そしてマキナは、FeTUSから新たな刺客「黒猫」が放たれたことを睦月とエンジユに警告するのだった。

藤田君は現在
FeTUS・
Witchesの
一人に狙われている

クミスッ……
通称を「黒猫」
彼女は私より強い
そして極めて危険

鈴の音がしたら
すぐ逃げて



伊部草さんから
忠告を受けて
数日が経った

僕を狙っている
という『黒猫』は
まだ姿すら
現していない

はあ……



とはいえこの毎日
獄肉たちが襲って
くるから

エンジョの
護衛なしじゃ
登校や帰宅は
できないん
だよな…

まだかな
エンジョ…

鈴の音……？

うわあっ!!

ふんっ!?



く…九里空さんか
びっくりしたあ

のっつ

ビックリは
こっちだよ

どーしたの？
藤田君が残ってる
なんて珍しいね


エンジュを
待ってるんだ

ほら今日って
水泳のアレな子
居残りの日でしょ

ああそっか
水泳補習ね

…でも
大丈夫なの？

へ？



エンジュちゃんと
離れちゃって
大丈夫？

.....
!!

……大丈夫
……って
なにが？

だっていつも
一緒にいる
んだもん

離れられない
事情でもあるの
かと思った

べつに……
し……親戚だから
よく一緒に
いるだけだよ

エンジユは護衛
だってこと誰も
知らないハズ
なのに……

ふーん……
親戚……ねえ

ところでさ
藤田君って里輪君と
仲いいよね

うん……
まあ……

丸里空さん
……なんて
……こんなこと
聞くんたらうっ

呼んだらすぐに
来てくれる仲
——とか？

そ……それほど
じゃないけど

そっか
そっかあ

漫画小説
連動企画!

魔を殲滅する最強の乙女が、
触手の快樂に吞まれていく……!!

退魔少女 **ガキ**
触手ノ宴 闇に染まる少女

小説 NOVEL 火村龍
ほむらりゅう

漫画&挿絵 COMIC ILLUSTRATION ふみひろ

サキはその日、運命の糸をつかみ取った。この四十日の間、それは蜃気楼のように彼女の前に漂い、近づくと嘲笑うかのように消えていた。だが、サキは確かにその一端をつかんだのだ。いま、年端もいかぬ少女の全身すべてが奴を殲滅せよと燃えていた。未だかつて感じたことのない衝動が彼女の中で暴れ、吠え猛っていた。

サキには使命があつた。呪いに蝕まれたこの身体を押しでも、あの醜い触手から、アリカを助け出さなければならぬという使命が。

昨日、サキが里に帰ったときには桶の水をぶちまけたように降り注いでいた雨は嘘のように止み、空には晴天が広がっていた。里を囲む山々は、初夏の青々とした若葉を茂らせ、朝露に陽を受け、きらきらと輝いている。天までもが、自分を祝福しているようだ。このときばかりはサキもそう思わずにはいられなかった。

妖魔出現を知らせる札が数十、里を束ねる長と五人衆の呪力によって宙に浮かんでいる。サキはその中の一つを躊躇うことなくつかみ取った。見慣れた長の字で「ある村に妖魔の気配在り」と書かれている。その文字からは、サキにしかな感じられない禍々しい気が溢れていた。少女の身体に刻まれた、淫虐の傷痕が叫んでいるのだ。

「行って参ります」

サキは告げた。浮かんでいた札が左右に退き、そこには六人の男が立つて

いた。先頭に立つ、最も年若い男。彼が里を統べる長であつた。ひとときも気の抜けない妖魔との戦いに身を置きながら、長をつとめ、そして温和で笑みを絶やさぬ、絵に描いたような好青年であつた。

「まだ帰つたばかりじゃないか。少しは休んだらどうだ」長は言った。「その通りだ。手が空いている者もいる。お前のおかげでな」

背後に立つ五人の一人が言った。彼らは、長と共に里を治める五人衆であつた。いづれも、熟達した技の使い手だ。法力、呪力、神道、忍術、武術、それぞれがいづれかの技を極めていた。「いいえ。すぐに向かわねば。ここにはきつと、奴がいます。アリカ姉様をお助けするのです」

「アリカが囚われてから、もう四十の日を跨ごうとしている。気持ちは我らとて同じだが、もうアリカは——」五人衆の一人が洪面を作つた。

「いいえ。やつてみなければわかりません」サキは首を振つた。「ならばこれを持っていきなさい」

長は諦めたような笑みを浮かべて、食料と竹筒にいれた水を差し出した。「ありがとうございます」サキは礼を言つて、装束の袂に仕舞つた。口の中で呪を唱え、装束に施した呪術が発動し、それらは異空間に消えた。

里に戻つたのは七日ぶりだつた。立ち並ぶ家屋。往來の隅にある、野菜や魚が並ぶ家。大量の武器が壁にかかり、

部屋中に置かれ、それでも足りずに往來にはみ出している家、外の城下町では見られぬ、呪符を揃えてある家——男だけでなく、女子供も歩いている。しかし、女はもちろん、子供ですら、外の者たちとは動きが違う。

見慣れた里、あの日、アリカとサキが守つた場所だ。

「あ。虎……」サキは口を開いた。路地から、手裏剣を持った男の子がこちらを覗いていた。手裏剣は玩具ではなく、殺傷能力を持った本物の武器だ。少年は、手に持ったものに似つかわしくない、無邪気でくりくりした目でサキを見つめていた。少年は、サキがよく一緒に遊び、鍛錬を見ていた子だつた。

「あは」サキは微笑み手を振ろうとした。「虎！」

だが、男の子がなにか言う前に、彼の母親が現れると、手を引いて背中に隠してしまう。

母親はサキに礼をすると、逃げるように路地に消えていった。

「あ……」サキは固まつた。宙に浮いたサキの笑顔と手はやがて力を失つた。

「すまない……」長が言った。「せっかく仲良くなつていたのだが……」クソ、あ的一件さえなければ「五人衆の一人が洪面を浮かべた。」

「いいんです」サキが言った。「ありがとう」長が言った。彼は手を

伸ばし、サキの頭を撫でた。

「……行って参ります」サキは微笑む。「ああ」長たちは頷いた。

次の瞬間、少女の姿はどこにもなかった。長たちにすら見えなかった。小さな童巻が、サキの立つていた場所に残り、やがて消えた。

野望を胸に秘めた戦国大名が群雄割拠する時代にあつても、里の役割に変わりはない。あらゆる忍、陰陽師、巫女、呪法師が各国の大名に味方をして、この里だけはどこに味方もせず、そして戦国の動乱に巻き込まれることもない。いかなる力を持った大名も、彼らを動乱に巻き込もうとはしない。里は現世にあつて現世になく、その存在はないものとされていく。

里が相手にするのは人ではあらず。闇に潜み、人を喰らう妖魔の類いだ。世の中では当代一といわれる術士、武術の達人であろうと、最下級の妖魔にすら赤子のようにあしらわれる。そういつた存在を相手にできる者たちが集うのが、里なのだ。

——里に住まう者は人間ではない。人間の皮を被つた妖魔である。それが、里を知る外の者たちの常識だつた。故に、誰も彼らに手出しはしない。否、できるはずもない。彼らが人間の心を持ち、妖魔を倒してくれることに陰ながら感謝し、心変わりして人里に下り、災厄を振りまかないことを祈ることしかできないのだ。

それが、里を知る外の者たちの常識だつた。故に、誰も彼らに手出しはしない。否、できるはずもない。彼らが人間の心を持ち、妖魔を倒してくれることに陰ながら感謝し、心変わりして人里に下り、災厄を振りまかないことを祈ることしかできないのだ。

った。性欲はあつたし自慰経験もあつた。だが、これほどまでには——。サキの瞳は変わらず虚空を見ている。口の端から涎が垂れる。唇が震えるように動いていた。

「ごめんさい。アリカ姉様、ごめんさい——」

悦楽に蕩けた意識は過去に飛んでいた。

「わたしはアリカ。殲滅師。今日からあなたの師匠だけど、師匠って言われるのは好きじゃないから、姉様って呼びなさい」初めて会ったとき、アリカはそう言つてこりと笑つた。

五年前、退魔師としての基礎を修めたサキの前に現れたのが、アリカだつた。一つ年上だったが、アリカはすでに殲滅師の任についていた。当時からサキの呪力は大きく、アリカをも上回っていた。だから、アリカはよく「わたしはすぐに引退できるわね」と冗談を言つたものだった。

サキが己の膨大な呪力を武器に闘うのに対し、アリカは早熟な精神と持ち前の冷静さで任務をこなした。サキが力ならば、アリカは技だった。サキに生まれつき妖魔をも凌駕する呪力が備わっていたように、アリカにも戦闘の才が備わっていた。彼女の任務についていったとき、サキが大きく仰け反つて躲す攻撃を、アリカが顔色一つ変えず、一寸の見切りで躲していく様に戦慄したものだつた。妖魔の攻撃は人間

が刀を振り回すのとは違う。見切ることもかなわない、もしくは本当に目に見えぬ攻撃を仕掛けてくる。それをアリカは事もなく躲し、敵の懐に潜り込む。

「サキはこんなこと必要ないの。せつかく大きな呪力があるのだから、それを磨きなさい」

アリカのように動けず落ち込むサキに、アリカはよくそう言つた。アリカの呪力も他の者より遥かに大きかったが、それでも、サキがやるような巨大な呪術の連発はできなかった。アリカは常に敵を観察し、脆い場所に呪符を撃ち込む戦法を好んだ。

歳も近く、同じ女で、境遇も一緒に、アリカも、里以外では化け物と忌み嫌われる力を持ち、里に来て、大きくすぎる力故に距離を置かれていた。サキを理解してくれたのはアリカだけだつた。殲滅師になるための鍛錬のときは厳しく、終わった後はいつもの妖艶な笑みを浮かべ、「情けないわね」などと言うアリカが好きだつた。その裏にある優しさが好きだつた。サキはアリカが大好きだつた。愛しているといつても良かった。

アリカと共に妖魔と闘つた日々は、危険ではあつたが、嬉しくもあつた。「サキ、わたしはこつちをやる。あなたはいいつを。任せたわよ」

一年前、初めてアリカにそう言われたときは、戦闘中にもかかわらず胸が熱くなり、涙が流れたほどだつた。

アリカもサキも年若く、里の掟を変え、二人とも殲滅師にすれば良い。仲の良い二人を見た里の者たちは口々にそう言つた。アリカと一緒に笑つていよううちに、皆も徐々に話しかけてくれるようになった。夢のような日々だつた。

だが、破滅は突然訪れた。

「サキ、逃げなさい！ こいつには……あひいひいひいひいっつっ!!」

甲高い悲鳴に、呪符を持った手が震えた。サキはその場に縫い止められたように動けなかった。

四十日ほど前、しとしとと雨の降る日の晩のことだ。アリカとサキが、里の危機を知り、とつて返したとき、いかなる妖魔に襲われても十日は持ちこたえられるはずの多重結界が最後の一つまで破られていた。たつた五日の出来事だつた。

目の前で巨大な影がうねっている。大蛇に見えるが、それは違う。影の体表からは、無数の細長い——影に比べれば細長い、実際は、サキの太ももほどの太さがあつた——なにかが蠢いている。

触手だ。里を襲つたのはたつた一体の触手だつた。

結界の前で触手に相対するのは、アリカとサキの二人だけだつた。他の者では相手にならない。それほどの力を持った敵だつた。長と五人衆なら勝機はあつたが、折り悪く、長と五人衆の内、半数が里を離れていた。彼らは結界を維持し、子供たちを避難させるので手一杯だつた。

結界の内にいれるわけにはいかない。アリカとサキは懸命に闘つた。だが、敵の力は、アリカとサキの想像を遙かに超えていた。

サキが尊敬してやまない少女はいま、触手に捕らえられ、秘部を責められあられもないイキ顔を晒していた。

——触手には気をつける。それは、里で退魔師として修行を始めてすぐ、そして一人前になってからも言い含められることだつた。

妖魔たちの中でも、知能を持たぬ触手は最も低級で、弱い存在だ。簡単な呪符で粉々に吹き飛ばしてしまう。だが、それでも最も警戒すべき相手なのだ。それが、サキの目の前で暴虐の限りを尽くしていた。

「アリカ姉様を放せっ！ やあつっ!! てえええいっつ!!」

サキは何度も呪符を放つた。符は次々に触手に命中し、炎獄の業火でもって魔を焼き尽くそうとする。しかし、触手はそれを受けても意に介さず、平然とアリカを犯し続けていた。

「や、やめなさいっ!! ま、股が蕩ける……オ、オマンコが……んひいひいっつ!! サキ、見ないでえっ!!」

ビクビクッ、ガクッ、ビクンッ!! サキの懸命な攻撃も虚しく、アリカは再び気をやっつてしまった。触手は総身を震わせ囁つた。



らに呪いをはね除けようと念じてはいるものの、気をやってしまった身体はそれに対抗する力を失っていた。

(わ、わたしも、ダメ……ああ……姉様、ごめんなさい……)

呪いが身体を蝕み、意識が朦朧としてくる。視界が薄れ、アリカの姿が霞がかかったように見えた。淫毒に冒され、身体が変質してしまつたのだらう。漏れ出る愛液に、自分の呪力が混ざっていた。漏れ出る量は微々たるもので、膨大な呪力を持つサキからすれば大したことはないが、呪力を漏らしてしまつている。という事実には被虐の喜びを感じてしまう。サキはアリカに謝りながら、意識を手放そうとした。

そのときだった。

「あなたは逃げなさい、サキ！」

アリカの声に、サキはハッと目を見開いた。雷のような音が自分のまわりで轟く。身体を拘束していた触手が次々に爆発し、さらに、サキの目の前で光が弾けた。

「アリカ姉様っ!! きゃあああっっ!!」

サキの身体が宙を舞い、里の境界内に落下する。受け身もとれず全身を強かに打つたが、その痛みも無視して飛び起きる。

アリカは触手に囚われたままぐつたりとしていた。呪力がほとんどなくなっているのがわかる。アリカはありつたけの呪力を使い、巨大な爆発を起こしたのだ。だが、呪力を奪われていた

アリカはサキを助けるだけの爆発しか起こせなかった。

触手が咆哮する。アリカの爆発は、ぬめぬめとした巨体の一部を削つていいた。臭気を伴つた体液が噴き出し、触手は苦しんでいた。

「姉様! ねえさまあっ!! あっ、ひき、んひいひいひいっ!!」

アリカを助けようとするサキだったが、注がれたばかりの精液が膣内で暴れ、再び地に膝をついてしまう。手が勝手に秘部をまさぐり、膣壁をかき回した。

「やめて、止まって! んひっ、イク、あああっ! ダメ、姉様、あああっ! 手が止まらない、そんな、待つて! 待つてええええええっ!!」

サキが望まぬ自慰に耽つている間に、触手は撤退を始めた。気を失い、俯いたまま沈黙したアリカの身体が、触手の体内に吞まれていく。

「姉様! アリカ姉様ああっ!! いやあああああ、イクうっ、またイツちやうううううっ!!」

触手が山の中に消えていく。サキは激しい絶頂と敗北感に身を灼かれながら、それを見ていることしかできないかった。

「あつ、あつ……で、でるっ」

膣奥から生じた奔流が出口を求めて膣口に殺到した。サキの意識は現実を引き戻され、小柄ではあるが引き締まつた肢体がエビ反りになった。

「イ、イク——!」

ぷしやあああああああっ! 勢いよく潮が噴き出す。飛び出しそうになる嬌声は唇を噛んで殺した。だが、絶頂を殺すことだけはできない。いかに強い精神力を持ったサキでも抗えない衝動だった。全身を蝕む変異触手の呪いは、弱まるどころか強くなる一方だ。

「ま、またイク……ッ! 潮噴き、止まらない——」

ガクガク、ビクツ、ビクンツツ!! サキは布団の上で療養し、転げ回つたピンピンにこつた乳首からも、わずかに液体が漏れている。呪力を含んでいるのは言うまでもなかった。

「はあ、はあ……あ、あうう、あう」

サキは枕元の竹筒をつかむと、中の水を一気に飲み干した。長にもらつた里の水が喉を潤す。美味しい、もつと飲みたい——少女がそう思つた瞬間、性衝動はさらに強烈に総身を襲つた。

「はううううううっ!!」

お腹を抱えて丸くなる。腹に染み渡つた里の冷たい水が、一気に燃え上がるような錯覚を覚えた。イツたばかりなのに愛液が止まらない。

「お、おかしい……!! こんなに強い呪いのな?! い、いままでの符じやも抑えきれない——」

「も、もつと強い符を……ッ」

けたような熱さを保っていた。少女は身を振り、荒い息をつきながら退魔装束に手を伸ばした。符をとり、震える手で秘所に添える。サキの呪力を込めた符は秘部にびつたりと張り付いた。すつと、先ほどまでの性欲が嘘のように鎮まつた。サキは肩を上下させ、何度か股間を撫でた。愛液が染みこむが、それも呪符の力で蒸発していた。

「アリカ姉様——」サキは呟く。

サキは焦つていた。アリカが囚われてからすでに時が経過している。呪いを浄化もせずに走り回り、ようやく見つけた手がかりを逃すわけにはいかなかった。

本来ならば、妖魔の、それも淫魔として最悪の力を持つ変異触手の呪いをまともに受けてしまつた者は、それを浄化しなければならなかった。だが、呪いが強い分、それを癒やすには長い時を要する。アリカを助けた退魔少女は、それを待っている余裕などなかった。呪いが強くなるとわかつていても、自身の呪力をつぎ込んだ呪符で、呪いを抑え込んでいた。

里の者たちは、アリカの生存は絶望的だと考えていた。しかし、サキだけは希望を捨てず、いまこうして、呪いに触まれながらも闘い続けている。

また、あの事件以来、化け物じみた戦いを繰り返したサキは、再び里の者から距離を置かれてしまつていた。

いまはそれでも構わない。里を守り、アリカを取り戻す。そうすれば、里の

く…こんな
触手なんか

な…なんとか
脱出しないと

触手からアリカを助けるため、
戦うサキの前に現れたのは……!?

嫌われたものね触手も
こんな良いものなのに

そそんな…
ア…アリカ姉様

その…姿は…

これ？
ふふ良いものですよ

すっ

すっ

すっ

妖魔ってねとっても素敵な
ものなのよね
あなたはそう思わない？



わたしを助ける？



姉様がそんな事
言うなんて…
そうか妖魔に
取り込まれてる所為で…

わたしが絶対
助けるからっ

まってて
アリカ姉様っ



良いわ遊んであげる
女である事を後悔する
くらいにね



サキ…あなた
わたしより呪力が強いからって
調子に乗ってるの？

あなたの事は
大好きだけど
そういう所は嫌いよ

え違…っ



くッ触手が...



妖魔の毒に
侵されてるのに
反応が鈍いわね



サキの呪力でも
この毒には抵抗でき
ないはずだけど

う……く……

ふふ呪符ね
これで今まで耐えてた
ってことね

けど残念この程度の
呪符ならわたしでも
簡単に剥がせるわよ



やめて姉様っ
それを剥がされたら

ハハハ

わたし…
わたし…ッ

わたしが…何?

ハハハ

ハハハ

ハハハ

あひいつ

うあああッ

だめ…だめえ
姉様っ姉様あッ

そういう声を
聞きたかったのよ
サキ

触手動かさ
ないでっ

触手の突起が
コリコリ
当たってるッ

当たってるッ



触手の容赦ない淫辱に
墮とされる悪の女科学者!!!

Dr.仁礼崎杏奈の
触手ラボ

小説 **酒井仁** 挿絵 **あまさひかえ**
NOVEL ILLUSTRATION

うぞぞぞ……うねうね……アマゾンの巨大魚でも育成可能な透明の巨大培養槽の中で、赤黒い肉塊が蠢いている。一見、軟体動物に見えるそれはよくよく見れば、目も、頭部も定かではない。

それはいわゆる「触手」。

腕のように太いものから、糸のように細いもので太さも長さも様々だが、ぬらぬらと粘液でぬめる異様な姿に、嫌悪を抱かぬ者はいないだろう。

こんな不気味な生物を育成している部屋もまた、様々な実験器具や機械で埋め尽くされ、さながらフランケンシュタイン博士の研究室のごとし。

はたしてこの触手の群れは、この部屋で産み落とされた狂気の産物なのだろうか。

「ああ……やはり今回もいい出来だわ。あとは他生物との融合実験ね」

と、培養槽を覗き込んでいた白衣の人物が、赤黒いそれを見ながらうっとりつぶやく。

腰まである茶髪に茶色の瞳、アンダーリムの金属フレーム眼鏡をかけたその人物は、女性。大人っぽい色気のある顔立ちは、かなりの美形。

白衣の下はボディラインのくつきりと浮き出た真紅のレオタードという大胆な出で立ち。しかもレオタードのあちこちにメーターやセンサーなどのメカパーツが付属している。

彼女は科学者ではあるが、とてもまともな研究者とは思えない。それもそのはず、彼女が所属している組織は非合法な犯罪結社……その名を「ダークフアング」という。

銀行や宝飾店の襲撃、非合法薬物の販売、地上げから株価操作まで手を染める、悪の犯罪結社。

この世界にはダークフアング以外にも悪の組織や秘密結社があり、それらと敵対するスーパーヒーローやスーパーヒロインたちも存在した。

「くつくつく……この子たちが実用化すれば、我

がダークフアングは敵なしだわ。ああ、我が愛しの触手ちゃん〜」

彼女——仁礼崎杏奈はダークフアングで兵器開発に携わる、マッドサイエンティストであった。

中でも彼女が愛してやまないのは、培養槽の中で育て上げた奇怪な触手生物。

触手兵器を用いて悪事を働き、正義のヒーローやヒロインをいたぶるのが何より大好きという、触手ラブの触手マニアだった。

杏奈はマジックハンドを巧みに操って培養槽から触手玉を取り出すと、それを小さなカプセルに収容した。

「Dr.仁礼崎杏奈……ちよつといいかな」

そのとき、杏奈の触手ラボに入室してきたのは、異様な風体の怪人。まるで昆虫のような外骨格をした怪人の名はディグニシオ。

彼は組織によって肉體改造された強化人間……ダークフアングの高級幹部であると同時に、会計監査の事務方をも務める有能な男だ。

だが、杏奈は居丈高な怪人に不機嫌そうな目を見る。

「アポもなしで失礼だな、ディグニシオ。地位はお前の方が上だが、ここは私の領域だぞ」

「先日マイティパワーとの戦闘……もつと言うなら、キミのあの触手兵器のことについてなのだが」

「ああ、あれも素晴らしい出来だった。さしものマイティパワーもなす術なしだったとか」

「組織の銀行襲撃を阻止すべく現れたのだが、見事に杏奈の触手が撃退したのだ。」

「くくく、今回開発したこの新型触手は、前回よりも更に強力な融合型……」

誇らしげな杏奈に、怪人幹部は苦い顔を見せる。

「前回の戦闘に参加した一部の戦闘員が、心的外傷

後ストレス障害……PTSDになったという報告が上がっている」

「……どういうこと？」

「決まっているだろう、マイティパワーは男性ヒーローだぞ！ 筋肉ムキムキのマッチョ男が、ぬらぬらの触手に絡め取られて光景など、おぞましくてトラウマものだ！ 触手の使用は、スーパーヒーローが相手のときだけと言う服務規定があったはずだが？」

「まったく心外なことを言われたと言わんばかりに、杏奈は目を吊り上げる。

「これだから美意識にかけた凡俗は……ヒーローでもヒロインでも、触手に責められる光景はぐつと来るに決まっているでしょう！」

触手ラブの女科学者の極論に、大幹部は眉根を寄せる。

「問題はそれだけではない。キミはどうも、触手にこだわり過ぎる。組織にとつて重要なのはヒーローを倒すことではない、利益を上げることだ」

両者の間に目に見えない火花が飛び散る。

怪人であると同時に管理職であるディグニシオが重視するのは、あくまでもダークフアングという組織の利益。

それに対して杏奈にとつて大事なものは触手開発。土台、相容れるはずもない。

「触手こそ究極の生体兵器！ 縛つてよし、挿入れてよし、強靱さとしなやかさを兼ね備え、正義を標榜する奴らを粘液で汚す、まさにオーララウンドプレイヤー！ それが理解できないと？」

それに、と触手を愛する女科学者は銀色のプレスレットのようなものを幹部に見せる。

「それは……まさか、あの忌々しいシルバーナイトの変身プレス！」

プレスレットが解放されると、杏奈の姿が一変す

る。白衣の下の真紅のレオタードは消え、銀色に輝くビキニスタイルのアーマーに変身したのだ。

それはマイティパワーと同じく組織と敵対する正義のスーパーヒロイン、シルバーナイトのコスチュームだった。

「こやつて、触手以外の研究も怠つてはいない。レプリカとはいえ侮れないというのを、身を持って味わつてみるか……?」

ぐつと拳を握りしめ挑発する杏奈の闘気を軽く受け流すと、ディグニシオは杏奈が先ほど触手玉を収めたカプセルを取りあげた。

「ほう……で、これが新型の触手兵器ねえ」

「ちよ、乱暴に扱うんじゃ……つて、私の触手ちゃんに、なにをしている!」

怪人幹部は触手入りのカプセルを己の股間にねじ込むようにした。するとカプセルは割れ、ディグニシオの股間と触手が融合してしまう。

うねうねうね……と赤黒い触手が大きさを増し、それはディグニシオの意のままに動き、杏奈の手足に絡みついてくる。

「なあと、それほどにキミが熱愛する触手の性能のテストをしてやろうというのだ。ちよど目の前に憎き敵の姿をした実験台もいる」

「ひ……?」

新型触手の力は杏奈の想像を超えていた。おそろくはディグニシオ自身のエネルギーを得てパワーアップしているのだ。レプリカとはいえ、シルバーナイトの力をもつても振りほどくこともできない。「ほう、思い通りに動くのだな。操作性もなかなかのものだ」

びりびりびりいいつ。

「きやあつ? な、なにをする貴様! 今すぐこの戒めを解かないと後悔することに……ッ!」
科学者のアイデンティティとも言うべき白衣に触

手が絡みつき、それはまるで薄紙のようにひき破られる。

杏奈の両肩や太ももが露わになり、そこに別の触手の群れが襲いかかる。
ぬるぬる……にゆるつ、にゆるるつ。

(わ、私の開発した触手ちゃんまでヒーローやヒロインを襲わせたことはあつても、私自身が襲われたことなんてないのに……)

いつもうっとり眺めていたぬるぬるの体液の感触に、杏奈は総毛立った。
触手に全身を這いまわられるのが、これほどおぞましいものだとは思つてもいなかった。しかもシルバーナイトのコスチュームはビキニアーマーで露出が多い。

むき出しになった肌部分に触手が身を擦りつけ、全身から分泌される体液でぬとぬとなる。そのうちに、粘液をすりこまれた部分だけが火照り始めてきたのだ。

「ディ、ディグニシオ……兵器開発担当主任の私はお前直属の部下ではない。こ、こんなことをしてただで済むと思つていいのか」

「いやいや、言つたらう、私はキミの新開発兵器の性能をテストしているにすぎない。それに、キミも愛する触手に刺られて、存外悦んでいるのではないかね?」

「こつ、こんなことをされて誰が悦ぶものか……!」
ぐぐ……と両下肢に巻きついた太めの触手に力がかもり、強制的に大腿開きをさせられる。

すると別の細身の触手が胸部アーマーと肌の隙間に入り込んで、くるりと乳首に巻きついて締め上げてきた。

「ひいっ、ち、乳首? や、やめるおつ」
たちまち硬くしる突起物をしごかれ、女科学者は身をくねらせて悶える。

油断して力の抜けた下肢の付け根からも細触手は入り込み、ちろちろと絶妙な動きで敏感な肉芽をまさぐつてくる。

「貴様、今すぐやめろ、そんなところ……い、弄るんじやない……つ」

「おやおや、さつきとずいぶん言っていることが違うじやないか。キミにとって触手は愛すべき存在なんだろう」

「クッ……ディグニシオ……ッ!」
雌豹のような目で睨む杏奈に、幹部怪人はにたりと意地の悪そうな笑みを浮かべる。

人間の何十倍にも強化された嗅覚は、女性科学者の股ぐらから漂ってくる処女臭をたしかに嗅ぎあてていたのだ。

「まさか触手でヒーローたちをいたぶるのが大好きなマッドサイエンティストが、処女だったとは、これは驚きだね」
ディグニシオの言葉に、杏奈の顔がかあつと赤くなる。

本当は股を閉じ身を隠したいのだが、こうも触手に絡め取られていては、大の字の恥ずかしい体勢でいることしかできない。

「わ、私にとつて大事なものはあくまで触手。お、男なんて相手にする暇はない!」

「それは勿体ないことだ。これほど魅力的な肉体を持つていながらヴァーजनとは。ところで、ヴァーजनにもこの触手の媚薬効果というのは有効なのかね?」

その言葉に、杏奈はさつきと青ざめる。
新型触手の分泌する体液には媚薬効果があるのだ。それは素肌から浸透し、じわじわと杏奈の快楽中枢を侵してゆく。

(うそ……さつきから体が火照つてしようがないのつて、そんな……)

デイグニシオが片手を振りあげると、一際太い触手がむつくりと頭をもたげる。

呆然とそれを見上げる女科学者の半開きの口めがけ、極太触手が猛然と襲いかかる。ずぼおっ、と凄まじい勢いで触手は杏奈の喉をこじ開け、先端はたちまち胃の腑にまで到達した。

「おご……お……つ。んごおおっ？」

どくんっ、どくつ、どく……触手がうねり、内部を液体が移動していく感覚。胃の中にたつぷりと媚薬液を吐き出してから、ようやく触手は杏奈の口から引き抜かれる。

「げほ、げほっ！う、ううう……っ」

激しく咳き込む杏奈の乳首とクリトリスを、再び細触手が颯り始めると、杏奈はびくんと大きく身を反りかえらせた。

「あひ、ひいひい……？ち、乳首とクリトリスが痺れ……？」

「ふむ……媚薬の効果は十分のようだな。ではDr.仁礼崎。先日よりの内値の結果についてキミに伝えよう」

「ない……その言葉の意味を、杏奈はすぐには理解できなかった。

「Dr.仁礼崎杏奈。キミは組織上層部に正式な報告もなく、不正な予算の使い込みを行っているな。これはダークフアングの掟に大きく背く裏切り行為に他ならない」

勝ち誇る大幹部の言葉に、杏奈は顔色を失う。

そう、彼は前線でヒーローたちと戦う大幹部であると同時に、組織の会計監査を担当しているということ、を、いまさら思いだしたので。

「ま、待って！それはこの新型触手兵器開発にどうしても必要な」

「言うまでもなく、我々は犯罪結社だ。非合法な行為に手を染めて組織を拡大し、利益を上げている。

だがそれはあくまで対外的なこと……身内の間で行われるルール違反は、厳しく追及されねばならないのだ。必要とあらば処罰も辞さない」

一片の情も感じられないデイグニシオの声音に、女科学者は恐怖のあまり、がちがちと歯を鳴らし始める。

自分が侵してはならない一線を越え、しかもそれがすべて露見してしまったことを悟ったのだ。

「Dr.キミが科学者として、生体兵器開発者として優秀なことは理解している。こんなことになって残念だよ。だが、掟は遵守されねばならない」

「くっ……も、もう二度と使い込みなんかしない。兵器開発もあなたの意に沿うようにする、だ、だから今回だけは見逃してくれないか」

反目していた相手に対し、屈辱を覚えつつも杏奈はそう口にはせざるを得ない。だが、怪人幹部は淡々と残酷な言葉を続ける。

「Dr.仁礼崎杏奈、キミは兵器開発主任を解任、今後は下級戦闘員相手の性欲処理要員とする」

上級幹部の口から出た「性欲処理要員」という言葉に、杏奈は我が耳を疑った。

「平たく言えば『肉便器』だ。まあ、せいぜい頑張ってくれたまえ」

「ちよ……待っ……」

何とか弁明しようとする女科学者に、デイグニシオはざらりと凶暴な目を向けた。と同時に、股間の触手玉が勢いよく蠢き始める。

「下級戦闘員に犯される前に、その見るからにいやらしい体を味わわせてもらおうか……」

「な、なんですって？そんなことされてたまるものか……ああああっ？」

手足に絡みついた触手が杏奈の股を広げさせ、ぬるぬるの体液をなすりつけるように白い肌を這い廻り始める。

「くっくく、処女の癖にさつきからメスの匂いがぶんぶんしているぞ、この淫乱が！その匂いを嗅いでいるだけで股間が疼いてたまらぬわ！」

「きやあああ……っ」

肉欲に支配されたデイグニシオの意のままに触手の群れが杏奈に襲いかかる。

ばぎばぎとピキニアーマーの継ぎ目部分が碎け、緩んだピキニ部分の下から豊満な肉球が「ぶるん」とこぼれ落ちる。

股間を包むパーツも緩んで、なんともしどけない半裸姿に剥かれてしまい、杏奈はかあつと顔が熱くなるのを感じる。

（こいつ……普段はくそ真面目な顔して実はDSだったなんて……！）

ずるりと大きくうねった触手が杏奈の腰に巻きついて宙に掴み上げると、局部をさらけ出したあられもない姿にされてしまう。

「ぐふ、ぐふふ……どうせこの先一生、キミは下級戦闘員の肉便器だ。新天地でキミが少しでも生きやすいよう、肉便器として調教してやる、ありがたく思いたまえ」

大幹部の目は血走り、いつもの冷静さはどこへやら、杏奈の裸身を穴があくほど無遠慮に見つめる。

だが、デイグニシオのいやらしい視線を感じるほどに、女科学者の肌は火照り、下腹部が熱くなってくる。

（あ、ああ……見られてる。全身全部、恥ずかしいところもぜんぶ……）

羞恥に顔を背ける杏奈を更に辱めようというのか、デイグニシオは杏奈を自分の目の前まで持ち上げ、ぎりぎり太ももをこじ開けていった。

太ももを閉じようと何度も内腿に力を込めるが、すぐに開脚させられ、処女の膣穴の奥まで覗き込まれる。

キヤイス
儿口儿☆

ジョエル
テニン☆

まじかる魔法☆バニー
ありす
漫画 ぱふえ
COMIC

人に仇なす
淫魔め!

おのれ!
我らの邪魔を
する魔法少女

キサマも
犯してくれる

魔法少女
だっ!

助かった
ぞー!!

自分の世界に
帰りなさい!!



今が…
チャンス!!

必殺!

オオオオ
オオオツ





あーあーあー

ぢいぢい

るるる

く...力が
入らない!!
そんな!
まだ生きて
いたなんて

愚かな:
私の血には
淫乱効果
があるのだ

え...!?
ちよっと
嘘...

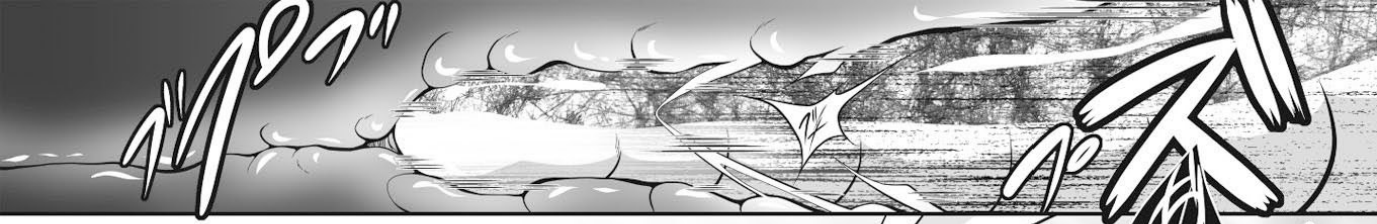
ゆしませ
てもらおう

ククク:
逃げた餌の
分はたっぷり

うう
ううだ!

だがこんなに
早く効くとは
淫乱の素質が
あるようだな

待...



粘液生物とのカジリバトルが勃発！
身体を賭けたその勝負の行方は!?

爆乳バニー 宇佐美マリア

美艶探偵の怪淫事件簿

第三話 船旅は危険な賭け

やまもと さき

小説
NOVEL

山本沙姫

挿絵
ILLUSTRATION

こうきくう

登場人物紹介



宇佐美マリア

人気オカルト小説家にして、怪奇事件を解決する敏腕探偵。クール&レバリーながら、人一倍負けず嫌い。



道明寺美奈

マリアをライバル視する、ライトノベル作家。大企業の社長令嬢であるがゆえ、尊大な態度をとりがち。

漁火空也

マリアの生活全般を支える、アシスタントの青年。裏社会に精通しており、怪奇事件の調査にも同行する。

大滝

空也の叔父で、警視庁のベテラン警部。毎回警察の手に余る怪奇事件の調査をマリアに依頼する。

前号までのあらすじ

アニメイベント事件にて明らかになった、人間を意のままに操る謎の粘液生物の存在。その正体に近く新たな事件の情報が、マリアのもとに届く。

「このテレビから毎晩流れてくるんですね？ 亡くなられた恋人の音が……」

アニメイベントの事件から半月後、宇佐美マリアは、とあるマンションの一室を訪れていた。心霊現象に関する悩みを寄せてきたファンを助けるために。

「ごんばんは、ニュースエクストラの時間です……」
若い女性の一人暮らしにしては飾り気のない部屋。その片隅に置かれた大画面テレビには、普通に番組が流れており、今はまだ特に異常はない。

「ええ、だいたい九時から……九時半くらいに……」
黒い瞳を不安げに曇らせ、華奢なで肩を震わせながら語るのは、知的な雰囲気を感じさせる、銀縁眼鏡をかけた長い茶髪の美女。

名前は笹塚麗華。ごく普通のOLである。
「手紙によると、画面や音声で乱れているってことですけど……その……だとしたら、聞き間違いということもあるんじゃないですか？」

慎重に言葉を選びつつ、怪奇事件専門の名探偵は真紅の瞳を鋭く光らせ、真剣な表情で問いかけた。
「間違いありません！ だって、麗華麗華って、苦しそうに呼びかけてくるんですからっ！ あ……す、すいません……」

反射的に金切り声を上げてしまった傷心の美女は、

咄嗟に手で口をふさぎ、深々と頭を下げる。

（かなりナーバスになっているわね。これじゃあ声の聞き間違いも無理ないか……）

マリアはオカルト作家でありながら、あらゆる超常現象は科学で証明できると公言している天才科学者でもある。しかし今回の依頼人には、すぐさま亡霊などいらないとは言えない。

なぜならそれが、亡き人を想う彼女の心を傷つけかねないのだから。

「きっと、成仏できなくてわたしに助けを求めて……でも、わたしにはどうしようも……お願いです、彼を……どうか彼を助けてください……」

「……なるほど。とりあえず、その声が流れてくるまで、ニュースでも観て待ちましょう」

思い詰める依頼人の気持ちも少しでも和らげようと、爆乳探偵は優しい口調で話しかける。

「埼玉宇宙博覧会で展示されていた隕石が、本日ロシアに返還されました」

するとタイミングを見計らっていたかのように、興味を惹かれる話題が流れはじめた。

「この隕石は展示中、閉館後にいつの間にか二つに割れて、中が空洞だったことがわかったため空洞隕石と呼ばれて人気を博し……」

「あー、もう帰っちゃうのか。これ見たかったけど、執筆が忙しくて行けなかったのよねー」

画面に映された、まっぶたつに割れたバレーボール大の黒い隕石に目をやりつつ、呑気に呟くマリアは胸の谷間に手をつたむ。

そして液晶画面が付いた、タバコ箱ほどのサイズの白い機械を取り出し、アンテナを伸ばした。

「先生、それは？」

目の前に出された得体の知れない機械が気になったのか、麗華は首を傾げて怪訝な顔で尋ねてくる。

「これ？ これは……あなたの悩みを解決してくれ

る魔法の箱、つてとこかしら」

「魔法……ですか？」

「なーんてね。ホントは……」

ズゾザツ、ザザザザザ……。
イタズラっぽい笑みを浮かべて手にした装置の機能を説明しようとした途端、言葉を遮るかのよう

にテレビ画面が乱れはじめた。
「……レイ……ガ……ウ……レイカ……ラ……ジ……レイ、カ……」

そして耳障りなノイズに混じって、低い男性とおぼしき声が途切れ途切れに流れてくる。

「先生、この声です！ ほら、わたしの名前を……」
確かに、麗華と呼んでいるようには聞こえる。

ピピピピピ……。
「ふむ……この方角と距離から察するに……」

しかしマリアは、テレビの画面に目もくれない。けたたましい電子音を鳴らす、手に持った機械の液晶に映された数値を読み取ると、真紅のタンクトップを纏った爆乳の谷間から無線機を取り出す。

「この最上階にいるわ。でも、危険な相手だったら無理せず逃げるのよ」

「かしこまりい……」

聞きなれた調子のいい返事とともに、通信が切れた。

「最上階？ そ、そこから彼が、呼びかけているんですか？」

話を耳にするやいなや、依頼人は身を乗り出して問いかけてくる。

「実は、依頼を受けてすぐに空也……、アシスタントに住人へ聞き込みさせておいたのよ。そしたらほかの部屋でも同じことが起きているのがわかったわ

「え？ わたし以外のところにもあの人が……」

目を丸くして驚く麗華に、マリアは首を横に振って答えた。

「あなたが愛しい人の声と思ったのは、ここの住人

の誰かが流した違法無線の混線。で、これを出どころを探ったってわけ」

丁寧に論ずような口調で告げると、美貌の天才科学者はあらためて手にした装置を見せる。

モニターには「直上、二十五メートル」の表示があった。

「マリア先生——っ！ 犯人身柄確保しました——っ！」

すると突然、ドアの外から妙にテンションの高い男の声が響いてくる。

「ハッ、ハナセエツ！ ナニスルカーツ！」

異様にドスの利いた、カタコトの日本語も。

「あなたの悩みの元が来たわ。さて、顔を拝むとしましょうか」

「え、ええ!？」

事態が飲み込めず、狐に摘まれたように呆然としている依頼人の手を引き、マリアは玄関へ向かった。

「こいつが犯人か。見覚えありますか？」

「はい、上の階に最近引越してきた留学生の……」

ドアを開けると、そこには痩せ細った色白の髑面男がいた。華奢な童顔青年に羽交い締めになされて。

「へえー、留学生なんて名乗っているんだ。ところがどっこい、実は国際指名手配中のテロリストなんだよねーこいつ」

「テロリスト？ あんたに取り押さえられるような、こんなヤブな奴が？」

暴れる痩せ男の肩越しに話しかけてきた空也に、マリアは不思議そうな表情で問う。

彼女のイメージからすれば、テロを起こすような男といえば重火器を使いこなせるぐらい筋骨隆々とした姿なのだから、意外に思うのも無理はない。

「こいつは爆弾技師でして、くっ！ 体力より頭脳派なんですよ。でもって、毎晩この時間に、国内に

潜伏している仲間と無線で連絡を取っていたってわけで、こら暴れるな！」

「なるほど。今時違法無線なんて珍しいと思っただけど、まさかテロリストが使っていたとはねえ……」

一必死にもがく痩せ男を締め上げながら話すアシスタントの言葉に納得した美貌の名探偵は、爆乳の上で腕組みしてウンウンと何度も頷く。

「でも……それならなんで、わたしの名前を？」

しかしどうにも腑に落ちない麗華が、控えめな口調で話に加わってきた。

「そういえば……音声が途切れているせいで麗華に聞こえるってわけじゃなさそうだけど？」

さすがの超科学探偵にもこの謎だけは解けず、長い金髪を靡かせて軽く首を捻る。

「それはですね、こいつの国の言葉で毒蛇を意味するレイ・カージって言葉があるんだけど、テロリストの間では爆弾を指す暗号になっているんですよ」

不敵な笑みを浮かべた傲慢な態度で、空也が二人に語りかけた。

「ふーん、つてちよつと！ あんたなんでこういうことに詳しいのよ？」

新たな謎が気になり、マリアは鋭い目付きで詰める。

「え、あ……それはー、そのー……」

ヴヴヴヴ——ウウウウ……

すると戸惑う彼の言葉を遮るかのように、窓の外からサイレンが響いてきた。

有能なアシスタントは、犯人を連れてくる間に一足先に警察へ知らせていたのだ。

「あ、来た来た。さーてマリア先生、とつとこいつ、警察に引き渡して帰らしましょう」

雇い主からの追及を逃れるかのように、空也は捕らえたテロリストを引きずって、足早に後ずさる。

「それじゃ笹塚さん。わたしたちはこいつを警察に

突き出すから、これで失礼します。後日警察から事情聴取があったら、協力してください」

「あ、待つてくださいい宇佐美先生」

軽く会釈して去りかけた美貌の探偵を、麗華は慌てて呼び止める。

「その……助けていただいて、ありがとうございます」

愛しい人が苦しんでいたわけではないと知り、晴れ晴れとした表情になった彼女は深々と頭を下げる。

「それで、依頼料なんですけど……」

「ああ、それね。あなたが早く、愛する人を亡くしたことから立ち直るのと、次の新刊を買ってくれることが、一番の報酬かしら」

依頼人の話を止めるように満面の笑みを浮かべて話しかけると、マリアは先を行くアシスタントの後を追った。

「ふう、一件落着。たいしたことなくてよかったわ」

違法無線犯を警察に引き渡し、簡単な事情聴取を終えたマリアは、愛用の白いセダンで帰路につく。

「まったく、今朝まで徹夜で原稿仕上げで、明日は叔父さんから依頼された調査があるんですから、今日ぐらいいは休めばよかったんじゃないですか？」

呆れ顔でハンドルを握るアシスタントからの、お小言を耳にしながら。

「そうはいかないわよ。だって……大事なファンが居もしない霊のことで悩まされているなら、すぐにも助けてあげないと……」

後部座席に深く腰を下ろし、軽く背筋を反らせた美貌のオカルト探偵は、氣息するような表情で答えた。

一見横柄な態度のようにだが、長年仕えているアシスタントには、それが照れ隠しなのが知られている。

「やれやれ、ホント無理しすぎるんだから。でも、だからこそお任せし甲斐があるってもんですよ」

バックミラーでチラチラと様子を窺いながら、空也が話しかけた。

「あんたも疲れているだろうに、付き合わせちゃって悪かった……ね……」

「先生？」

急に静かになった後部座席には、小さな寝息が響いていた。

優秀なアシスタントが極めて静かな安全運転で走らせているのは、どこでもよく見かける大衆車。

しかし美貌の科学者が持てる技術のすべてを注ぎ込んで改良しており、高級リムジン並みの乗り心地とあっては、眠りに落ちるのも無理からぬこと。

「事務所に着くまで、ゆつくり休んでいてくださいな」

疲れた雇い主を気遣い小声で呼びかけると、空也は軽くアクセルを踏んだ。

（いったい、誰に憑りついているのかしら？ あの寄生物……）

時は流れて翌日の夜、マリアは空也と共に豪華客船レインボーホール号に乗り込んでいた。大滝警部から依頼された、怪奇事件の調査のために。

船内に設けられたカジノ風遊戯施設のコンパニオンとして潜入した彼女は、接客しながら周囲に目を光らせる。

（今のところ、おかしな乗員や乗客は見当たらないわね……）

事の発端は一週間ほど前、大滝が沖縄県警の友人から聞いた話にあった。この船の女性客が男性乗員に乱暴されかけた、と訴えてきたのである。

幸い、咄嗟にバッグで殴り倒して大事には至らなかったのだが、その男が襲いかかってくる前に、耳の中に薄緑色の粘液が入るのを見た、という。

（まあ、こんな話が来るのはわたしのところぐらい

しかない、か……）

該当する乗組員は急な体調不良で航海中は床に臥せていたことや、事件の目撃者がいないことから県警は容疑者を逮捕できずにいた。

しかし、大滝は見逃すわけにはいかない。

（……それにしても……なんでまたこんなカッコしなきやいけなわけ？）

豪華客船へ潜入するにあたって、依頼主が手引ぎに利用したタレント事務所が用意したのは、白を基調としたパニーガールの衣装であった。

肉付きのいい身体に纏っているのは、エナメル素材のボディスーツ。白い柔肌にフィットしたそれは、首から乳首ギリギリまでがぼ剥き出し。

遊戯場内を歩き回るたびに、大きく波打つ挑発的に突き出したロケット乳を男性客がチラ見しているのがわかった。

（何よ！ 上流階級の紳士面していても、下心見え見えじゃない……）

厭らしい視線の集中砲火を浴びるのは胸だけではない。魅惑的な肉体のすべてに注目が集まる。

肩から先、白いカフスを巻いた手首以外を曝け出した細く長い腕。

鋭角的に切れ上がった股間部にTバックがキリリと食い込んだ大きな桃尻。

そして、明るいページジュのストッキングを履いた生足と見紛いそうなムチムチと張りのある両足。

爆乳美女の妖艶な肉体をギリギリまで晒すコスチュームにあって、頭に載せた、白いフサフサの毛で覆われた長いウサギ耳が、彼女の中に潜む少女のよう

な可愛らしさを引き出していた。

（毎度こんな格好させられるのって、これ大滝さんの趣味なの？ あ、この前のなんとかパニーは大滝さん関係ないか……）

「……まあ、日本でできるのは所詮カジノの真似事

こども内装は豪華でサービスもいいけど、やはり本場のラスベガスには敵いませんわあ」

気恥ずかしさに頬を染めつつ、依頼人に理不尽な疑惑を向けていると、どこからともなく非常に聞きなれた甲高い女性の声が聞こえ、背筋に震えが走る。

「げ、この声は……」

恐る恐る声のする方へ視線を向けると、そこには三人のボディガードを従えた、スレンダーなボディに青いドレスを纏った美女がいた。

（やつぱりあんたか、道明寺美茶！）

以前に事件調査の関係で、恥ずかしいコスプレを強要された天敵娘の出現に思わず漏れそうになる声をグツと堪え、マリアは足早に退散しようとする。

「あああり、そこにいるのは宇佐美マリアさんじゃございせんかあり？」

しかし場内唯一の金髪パニーが目立たぬわけがなく、あつさりが見つかったしまった。

「え、宇佐美マリアって、あのオカルト小説家の？」

「さつきから似てるな！ って気はしていたけど、やつぱり本人なのかー」

美茶の呼び声を聴くやいなや、場内の男性客たちが次々と騒ぎ出す。

「あ、あら！ 道明寺先生。こんなところでお会いするとは、き、奇遇ですわねえ。旅行ですかあ？」

変に神経を逆なでしては色々と面倒になると感じ、咄嗟にマリアは引き撃った笑みを浮かべつつ低姿勢をとる。

「ええ、次の新刊の予約が好調なので前祝のバカンス、とでもいいますかしら。ほーっほっほっほー」

一方的に対抗心を燃やしてくるお嬢様ラブ作家は、口元を手で隠し勝ち誇ったように高笑い。

「そ、そうなんですなあ。よかったですねー」

「で、大人気のおカルト作家さんがな、ん、で、パニーガールなんてやっていらつしやるのかしら？」

両手を腰に当て、軽く反り返った威張りポーズをとりながら、美茶は冷やかな視線を送って問いかけてくる。

「それはその……つ、次の作品で、バニーガールが悪霊に憑りつかれるってシーンがあるから、そのイメージ作りのために、ね……」

なにか胸の内を見透かされそうな目付きにたじろぎつつ、マリアは苦し紛れの言い訳を口に出した。

「あらそうでしたの。てっきり、新刊の予約が少なくてアルバイトしないと生活が苦しくなりそうなのかと思いましたが。では、ごめんあそばせ……」

嫌味たっぷりの笑みを浮かべて憎まれ口を叩くと、美茶はスタスタと立ち去っていく。

（まったく、やつかいなことになってきたわね。でも……あいつはこんな調子じゃなきゃ困るのよね）

年下の娘に人前でこき下ろされながらも、二週間前のアニメイベントで男に襲われかけたり謎の生物に寄生されたりしたのを覚えていない様子に、ホッと胸を撫で下ろした。

「おい新人、このグラス全部洗っとけよ」

「あ、はいはいだいまー」

マリアが遊戯場で美茶と楽しくない談笑をしていたころ、空也は汚れた食器と格闘の真つ最中。

彼は叔父の手引きで、厨房の下働き要員としてこの船に潜入しているのであった。

しかしそのせいで洗い場や食料倉庫を行ったり来たりで、本来の目的である船内の誰かに憑りついて

いる怪奇生物を探ることができない。

「まいったなあ。いつまでかかるんだろこれ。つかこんなデカイ船になんで食器洗い機ぐらい積んでいないわけ？」

ぼやきつつもスポンジを持った手をせわしなく動か

く。料理好き故に、あとかたづけにも手を抜けない。（……それにしても、レベル低いねえこいつら。ホントに豪華客船の専属料理人？）

厨房をせわしなく動き回り、次々とご馳走を作り上げていく料理人たちが、自他認める料理の達人の目には、まるで素人のように見える。

おぼつかない手つきで器具や食材を扱い、ガスコンロの火力調整も適当と、まるでなっていないかつた

「あーもう見てらんないねえ。ほら、貸して」
とうとう我慢しきれなくなった空也は、若手料理人の手から包丁をひったくると、まな板に載せられたキャベツめがけて素早く何度も振り下ろす。

ザッザッザッザッザッザッ……

軽快な切斷音とともに、千切りになったキャベツが山となって積まれていく。

「すげえ！ こんな見事な包丁さばき、はじめて見た」

「よかつたら俺にも教えてくれないか？」

いつの間にかほかの料理人たちも手を止めて周りに集まり、口々に達人の腕前を誉めはじめた。

「お安い御用だよ。ほかにも聞きたいことあったらなーんだって教えちゃうよ」

すっかり調子に乗った空也は得意げな笑みを浮かべて、ギャラリへ自信満々に呼びかける。

「おい、その新人」

だが、そんな彼を苦々しく思う者が水を注す。眉間に皺を寄せた険しい表情で睨みつけてくるのは、ほかの料理人よりひとときわ高い帽子を被った白髪の大男。

「あ、り、料理長……なんでしょう、か？」

「ここはいいから、しばらく休憩してこいや」

口元を恐怖に引き攣らせて問いかける空也を見下ろして、初老のシェフは威圧的な態度で答える。

「え、でも、この忙しいときにおいらだけ休むなん

て

「いいから行ってこい！ しばらく戻るな！」

「はっ、はいいいいい——」

頭上から雷を落とされた小柄な青年は、まるで親に叱られた子供のようにそそくさと厨房から飛び出していく。

しかし彼は知る由もない。経験豊富なシェフは、目障りな若造が自分の立場を危うくするほど腕が立つと見抜いていることを。

「あー驚いた。ひよつとするとみんな、レベルが低いんじゃないの？ あの料理長に怯えて実力出さされてないのかもしれないな」

デッキに追い出された空也は呆れたように呟くと、ズボンのポケットから使い捨てライターに偽装した機械を取り出す。

「でもこれでやつと調査ができる。さて、先生からもらったこいつを試してみますか」

超音波発生装置。マリアが使用する、ロザリオ型超音波探査機の簡易量産型、とも呼ぶべき装置。

「あのドロドロした奴に寄生されている人がいたら、こいつが出す超音波で苦しむってわけだ。探すの簡単じゃん」

カチッ！

「さて、あとはこれを持って適当に歩き回れば……」

カサ……カサカサカサ……ズザザザザザ……。

スイッチを入れていざ調査開始しようとしたそのとき、足元から床をタワシで擦るような耳障りな摩擦音が響いてきた。

「ん……何の音……だ？」

床に視線を落とした空也は、思わぬものを目にして青ざめる。そこには大量の調理場の天敵が仰向け

になつて苦しげに足をバタつかせていた。

「どわあつ！ なつ、なんでゴキブリがあつ！」

思わぬ事態が発生し、慌てふためく空也はこの期に及んでマリアから言われたことを思い出す。

「いい、これはあくまで敵に襲われたときに使うのよ。超音波の出力が強化してあるから、迂闊に起動させると大変なことになるからね」

「あれって、そこいらに隠れているゴキとかが超音波に反応して逃げ出してくるってことだったのかー、ちゃんと説明してよもう」

慌ててスイッチを切ると、漆黒の群れは起き上がり、どこかへと走り去っていった。

「あー驚いた。清掃が行き届いているはずの豪華客船でも、やっぱりいるところにはいるんだなあいつら……ん？」

「ぐううう……」

厄介者がいなくなっと思いきや、今度は奇妙なうめき声が聞こえてくる。

「な、なんだいったい？」

辺りを見回してみると、柱の陰に薄いグレーのスーツを纏ったガッチリした体格の中年男が、頭を抱えて蹲っていた。

肩の何か意味ありげなワッペンやカッチリとした帽子から察するに、どうやら航海士らしい。

「あの、どうかしました？」

苦しげな男を助けようと、空也は手を差し伸べる。「なっ！ なんでも、ないっ！ た……ただの船酔いだ！」

しかし船員は裏返った声で叫ぶと救いの手を振り払い、怯えるように引き攣った表情を浮かべて足早に去っていく。

（……船員が船酔いだって!? これは怪しい……）
腑に落ちぬものを感じる優秀なアシスタントは気づかれぬよう距離を置き、怪しい男の後をつけた。

「いやーキミのおかげでまた勝てたよ。ありがとう」

お嬢さん。キミはまさに勝利の女神だねえ」

「そんなあ、光栄ですわ」
空也が怪しい船員を調べはじめたところ、遊技場のマリアはルーレットに夢中な老紳士の相手をしていった。

ゲームを楽しみつつ、時折異様にギラついた目付きでこちらを見てくることから、寄生生物に憑りつかれている可能性があると思んだのである。

（まったく、こんな厭らしいじいさんの相手しなくちゃいけない……）
負け続けて不機嫌そうどころへ、出る目を教え

ると話しかけると、彼は喜んで話に乗ってきた。

とはいえ、根は恥ずかしがり屋の爆乳娘は、柔肌をねつとりと舐め回す視線が不快なことこの上ない。

（しかし、ホントにお金賭けられるわけじゃないのに、こんなに夢中になれるものかしら……）

カジノに興味がない彼女の目には、大の大人が真似事のギャンブルではしゃぐ姿が珍妙に映る。

これも、人間とは思って違っている寄生生物だからこそ反応なのか、と。

（おまけに他人の口添えで勝ったって、何が楽しいのか。わたしのスーパー超科学力をもってしても解せないわ……）

鋭い洞察力と計算能力を持つ天才科学者にとつて、出る目を当てるなど造作もないこと。

ルーレットの回転と投げられる鉄球のスピードから、ほぼ百パーセントの確率で割り出せる。

それをほかの客に聞かれないよう耳打ちするだけでこんなに喜ばれるのがどうにも理解しがたい。

（あれ？ そういえばこの人、何度か聞き返したわよね。どこにボールが入るかを……）

粘液生物に憑りつかれた人間は、その弱点である普通の人間には聞き取れない超音波を捕らえられるほど、聴覚が鋭くなっているはず。

ならば雑踏の中の小声とはいえ、耳のすぐそばで喋っているのを聞き逃すとは考えにくい。

「あ、あの……、お客様。申し訳ございませんが、そろそろ……」

「ああ、すまんね引き留めて。はい、これチップ」
寄生されていないと判断し、そろそろ立ち去ろうとしたマリアが控えめに話しかけると、老紳士はニヤケ顔で懐からサイフを取り出す。

そして中から抜き出した一万円札を、たわわに実ったスイカを髻髻とさせる胸の谷間へ差し込む。

「わ、わあ、こんなに頂いて、ありがとうございませう」

引き攣った笑みを浮かべながらお辞儀すると、爆乳パニーガールはくると彼に背を向けた。

（どうやら単なるスケベベジイのようね。時間のムダだったわ……）

「やあパニーちゃん、ちよつと、いいかな？」
次なるターゲットを探しはじめようとした矢先に、行く手を遮る者があらわれる。

鼻の下を伸ばした下品な笑みを浮かべて近づいてきたのは、白いタキシードを纏った太めの体躯の男。

胸ポケットに露骨に見えるように突つ込まれた札束から、金にものを言わせるタイプのタチが悪い御曹司、という雰囲気が見える。

弛んだ頬に浮いた脂汗と、キツチリと七三に分けた黒髪を固めるポマードが、大男の暑苦しさをさらに際立たせていた。

（パニーちゃん！ この喋り方、この前のカメラ小僧に似ている。まさかこいつが……）

邪な欲望を滾らせたカメラマンたちに淫らなポーズを強要され、恥ずかしい写真を撮られまくったことが頭をよぎる。

柔肌を舐め回すどころか、ボディスーツの下まで見透かしているかのような鋭い視線が身体にチクチ

クと刺さる感覚も、あのときと同じに感じられた。
「は、はい？　なんででしょうか？　お客さま……」
「いやー、さつきから見えていたけど、キミなかなか強いねえ！　ルーレット」

さらに続けて投げかけられた言葉が、爆乳探偵の推測を確たるものとする。

（こんな大勢人がいるところで、わたしがあのじいさんに小声で耳打ちしているのを聞けるなんて、並大抵の聴覚じゃない。ピンゴね、ならば……）

気色悪い男の態度に背筋が寒くなるのを堪えつつ、マリアは彼の話に乗って様子を見ることにした。

「ええ、わたしギャンブルは、得意なんですよ」

「へーそうなんだー頭いいんだねー。かく言うボクも、ルーレットは得意でねえ。よかつたらお相手願えないかな？」

口元をヒクつかせた愛想笑いで答えると、暑苦しいタキシード男は嬉々として勝負を挑んでくる。

「勝負、ですかあ？」

「うん。キミが勝つたらさつきのじいさんよりチップを弾んであげる。でも、ボクが勝つたら一緒に部屋でディナーに付き合ってもらうって、どうかな？」

「……いいですわお客様。その勝負、お受けいたしますう」

思いがけないチャンスの到来に、つい目付きが鋭くなりそうになるのをグッと堪えて、マリアは精一杯の営業スマイルで挑戦に応じた。

（個室で二人きりなら、ゴキブリが溢れるのを気にせず探査機が使えるわ。超音波で脅して、奴らのことをもつと聞き出してやる）

一つの計略を胸に秘めつつ、マリアはターゲットと向かい合ってテーブルにつく。

「さてと、早く決着つけてキミとディナーを楽しみたいからねえ。赤か黒、どちらかに賭けるといっはどうか？」

ニヤニヤと余裕の笑みを浮かべながら、目の前の大男は一発勝負を持ちかけてくる。

「二分の一の確率勝負ってわけですね。いいですよ」
彼女の返事を聞くと、彼は片手を上げた。すると呼応するように、白い正装で身を引き締めた優男のディナーがルーレットを回す。

ゴウンゴウンゴウンゴウン……。

さらに続けて腕をサッと振り、小さな鉄球をルーレットめがけて送り出した。

シュオンシュオンシュオンシュオン……。
鋭い金属音を響かせて、銀色の球がルーレットの縁を走る。

（……この動きなら……うん、間違いない赤の七ねならば……）

鉄球とルーレット盤の動きを真紅の瞳で追いながら、素早い計算で当たりを予想したマリアは、細くしなやかな指で一枚のチップを黒の枠へ置く。

「ほう、そっちでいいんだね。ならば……」

対する暑苦しいドヤ顔のギャンブラーは、腸詰のように太い指でチップを赤枠に載せた。

互いに賭け終えたところで、徐々にルーレット盤のスピードが落ちていく。

カラララララ……カコン！

そして、金属球は美貌の天才科学者が予想した通り、赤の七番ポケットに落ちた。

「やったあ！　ボクの勝ちい！」

「あら残念。でも、お客様みたいな素敵な方とディナーだなんて、むしろラッキーかもしれませんわ」
頭上で手をパンパンと打ち鳴らして喜ぶギャンブラーに楽しげに話しかけつつ、金髪バニー探偵は笑顔の仮面の下で臨戦態勢を整える。

（さて、あなたの正体暴いてやるわ……）

「この部屋って、確かこの船で一番高価なんですよ

ね。はじめて入りましたわ」

大男に連れられてやってきたのは、きらびやかな調度品で飾られたスイートルーム。

出航前に一度、内部に粘液生命体が潜んでいないか調査しているが、相手を油断させるためあえてはしゃいでみせる。

「気に入ってもらえたかな。ボクぐらいのセレブになれば、こんな部屋取るのぐらい簡単なもんさ」

両手を腰に当てて、分厚い胸を張って自慢げに答える御曹司は一見すると自分の富をひけらかしているだけのよう。

しかし、そのドヤ顔の裏に邪な欲望が隠れているのを、名探偵は見逃さない。

カチツ……。

（……やはりそうきたか……）

大きな音を立てないように、さりげなくドアの鍵を掛けているのを、赤く鋭い瞳は捕らえていた。

「ええ、すごく気に入りました。それで、ディナーはいつ届くんですか？　わたしずっと働きつめ、もうお腹すいちゃって……」

「ディナーならもう届いているよ。キミがボクのディナーじゃないかあつ！」

胸元で手を握り合わせ、空腹を告げるのを恥ずかしがっているかのように身を振りながら問いかけると、脂ぎった大男は両手を広げ、抱き付こうと迫る。

「正体をあらわしたわね！　これでも食らえつ！」
か弱げなバニーガールから一転して鋭い口調で言い放つと、マリアは爆乳の谷間からロザリオ型超音波探査機を素早く抜き出してスイッチを入れる。

カチツ！

「十字架？　ボクは吸血鬼じゃなくて可愛いバニーちゃんを食べちゃう狼男だぞー」
「……あ、あれ？」
ポフンツ！



ところが、苦手な超音波を浴びせられては、ずなにも大男は怯みもせず、傍らのベッドへ爆乳パニー探偵を押し倒す。

「ちよつ、ちよつと何よ！ まさかハズレだったのー!?」

「んふふふふふー、こんな極上パニーを捕まえられるなんて、この船当たりだなー」

予期せぬ事態にみまわられて混乱する美貌の科学者は、咄嗟にのしかかる巨体の胸板をボカボカと拳で叩くものの、相手はビクともしない。

「んー、いい感触だあー」
グニグニグニグニッ……。

両手で柔らかなロケット爆乳を掴み、太い指が柔肌に突き刺さるかと思うほど、強く揉み扱いてくる。

「いっ、痛い……」
あどけなさの残る美貌が苦痛に歪み、頬が恥ずかしさでみるみるうちに紅潮していく。

「ふふふ、可愛いねえ。だーいじようぶ、きもちよくしてあげるからねー」
頬に汗ばむ顔を押し付けて粘つくく囁きつつ、大男は片手を股間へと伸ばしてきた。

「ひっ！」
エナメルスーツの切れ上がりへの辺り、女性の最も敏感な部位の間近を指がへびの群れのように這い回り、股間から背筋へ悪寒が一気に駆け抜ける。

「ほおー、感じやすいんだねえパニーちゃん。ますます気に入ったよー」
「だっ、黙れえつブタ男っ！ 離れなさいよおっ！」
思わず朱に染まった肉体をビクンとはね上げてしまふ爆乳パニーの姿に興奮する大男を、キッと睨みつけて怒鳴りあげる。

「そーんな悪い口は、ボクの素晴らしいものでふさがないといけないなあー」
すると彼は身を起こし、嬉々として一物を引き出す

そうとズボンのファスナーに手を掛けた。

(今だ！)

咄嗟にマリアは胸の谷間に手をつ込み、中に常備している必殺の武器、超振動ハンマーを取り出す。「調子に乗るなあっ！」

「ドガッ！」
「ふぎやうっ！」

巨大なハンマーに側頭部を打たれると、邪な御曹司は無様な叫び声を上げて窓際まで吹っ飛び、仰向けにバツタリと倒れ込んだ。

「ふう、やれやれ。こいつもハズレだったわけね。ま、沖繩に着いたら警察に突き出してやるからそれまでいい夢見ていなさい」

ベッドから飛び降り、冷やかな視線を送りながら言い放つとマリアは部屋から出た。

「おおお——」
するといきなり、妙な歓声が聞こえてくる。

「!? 遊技場の方ね。何かあったのかしら？」
ただならぬ気配を感じた名探偵は、声のする方へ慌てて駆け出した。

「何？ この妙な空気は……」
カジノ風遊戯場に戻ってきたマリアは入り口脇の壁に寄りかかり、そつと中の様子を窺って呟く。

「チップも残り少ないですし、もう勝つのは無理ですよ。いい加減にあきらめて、ここをカジノのまがい物呼ばわりしたことを詫びてはどうですかな？」
「ほ……本当のこと……言っただよ。誰が詫びるものですか。そつちこそ、わたくしに……無礼な態度をとったこと、土下座して詫びる気になりましたか？」

ルーレットのテーブルを挟んでイスに座り、互いに睨みあっているのは道明寺美茶と、グレイのスーツを着た見覚えのある初老の紳士。

(あの男は……そうだ、確かアミューズメント王の新庄幸人。まさかこんなところで会うとは……)

彼女が思い出したのは、ゲームセンターから巨大テーマパークまで、さまざまな娯楽施設のデザインや運営を手掛ける大物プロデューサー。

アミューズメント業界に関する著作も多く、マリアとは出版社のパーティーなどで面識がある。

美茶との会話から察するに、この遊技場を本場のカジノに敵わないと揶揄した彼女に詫びを入れさせようと、ルーレット勝負を挑んだらしい。

(ここもあの人が手掛けていたのか。しかし、謝らせるのに勝負するのはともかくあの道明寺の様子、尋常じゃない……)

背筋を丸めてイスに座るドレス姿のお嬢様は、熱に浮かされたかのような赤ら顔。半開きの口からは、ハアハアと荒息が漏れている。

さらに時折、固く閉ざした膝をモジモジと振る姿が、まるで尿意を堪えているかのよう。

(さつきは憎らしいぐらい元氣だったのに、具合でも悪いのかしら？ あれ？ そういえば……)

部屋を出る前と何か場内の様子が違う。妙な違和感を覚えた爆探偵は、真紅の瞳を凝らしてさらに注意深く観察してみた。

中では誰もが皆、二人の勝負に注目しているらしく、周りを取り囲むように男たちが集まっている。(みんな自分が遊ぶのも忘れて見入っていて……そうだ！ 女性客が見当たらない……)

「んっ、あつあうんっ！」
ようやく疑問が解けたそのとき、どこからともかく奇妙な喘ぎ声が聞こえてきた。
(いったい何が……あ……あれは！)
壁状に並ぶ男たちの隙間から、驚くべき光景が微かに見える。

「あつ、そこ……いい……」

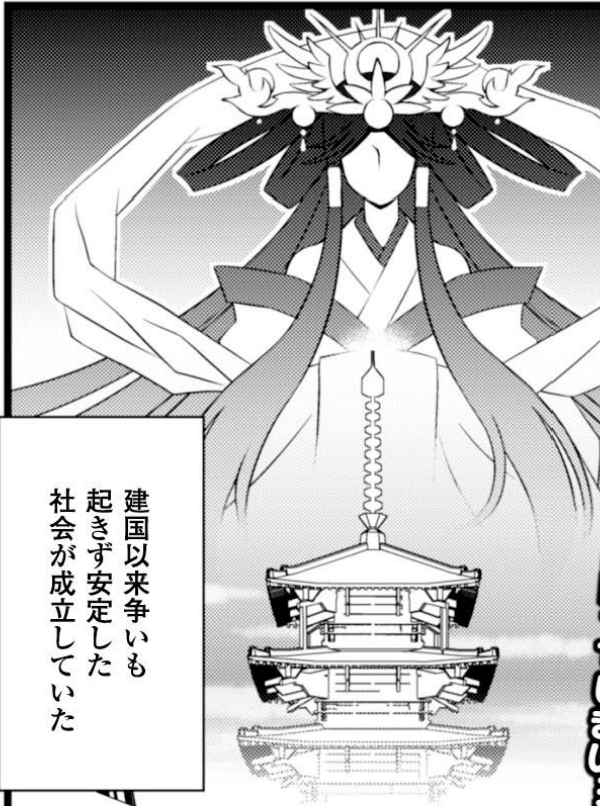
十九世紀
人間から漏れ出す思念が
凝り固まり人間界とは
異なる世界が構築された



エーテルランドと名付け
られたその世界の住人は
念ずるだけでその通り
なる能力「魔法」を使う
事が出来た

その後同様の世界が
思念の海に
構築されていった
エーテルランドから
遙か東方にある世界も
その一つだった

「イズモ」と言われた
その世界は女帝を
中心に統治され



違反者を
追い詰めた巴だが
逆に窮地に陥つてしまふ!!

建国以来争いも
起きず安定した
社会が成立していた

しかしその状況が
3年前に一変した
一部の上級魔法使いが
人間の思念を求め
無断で人間界に発現する
ようになったのだ



事態を憂いた女帝は
討伐隊を組織また
賞金を賭け実力のある
賞金稼ぎ達を募り
事態の収拾に
乗り出したので
あった――



第2話

漫画
COMIC

ひぐちいさみ



んああっ!

はっ…
放してえ…!

ああっ! いやっ!
やっ…めて!
やだこんなの…

アッ!

グフフ…モット
キモチイイコト
シチャオウカナ

ひっ!?

アッ!



いやあつ
お尻……!

グフフ
ヨォ〜ク
ホグサナイト
ナァ〜

お尻の穴
穿らない
でえつ!

ダメダネエ
ケツノアナニ
タップリ
ソソギコンデ
ヤルゼエ
グフフ〜



かか
甘露お
……!
……!



ううっ……
屠毒丸が
あれば……
なんとかなる
のにい……



あひっ!

あっあっあっ……
あっあっあっ……
あっあっあっ……

こっ…
こんなに
奥まで…
抜いてよお!

ダメ…お尻と
おま…こが
シンシンして
きちやう…!

グフフフ
ドウダァケツノ
アナホジクラレテ
キモチイイカア?

オレン
ブンシンヨ
コロシヤガッテ

ソーラ
オレサマン
セイエキヲ
ハラガ
ハチキレルマデ
チュウニウダ!

ナニモンカ
シランガ
タダシヤ
スマサネエ
カラナ





ひきこ〜

やめてえ!
中に出さない
でえっ!

熱いのが
凄いや
入って
来るよう!

グワッ...
ドーダァ
ハラパンパン
デクルシィ
カアッ

きゅ

ぐきこ

ホホ

ホホ

キュルル

キュルル

きやーっ
助けてー!!

闇夜に潜む悪を討つキュートなシルエット!

誰かっ...誰か...!!

いるわっ
ここに
ひとりね!!

!?

イア! 叫んでも
無駄だニヨロ!!
こんな場所じゃ
誰もこないニヨロ!!

クチユヌプ団は
許さない!!

ぱすたちゃんの
活躍が読めるよ!



「ぶにぶにくれぱす」

邪神ハンター
ぱすたちゃん
只今参上ウ!!

邪神ハンター
ぱすたちゃん
リターンズ

漫画 COMIC かいばらけい^や 海原圭哉

イア…出たな
我らクチュヌブ団に
逆らう愚か者め

私は
タコ怪人のようには
いかないニョロ!!

フン! お前なんか
蒲焼きにして土用の
食卓にお届けなのだ

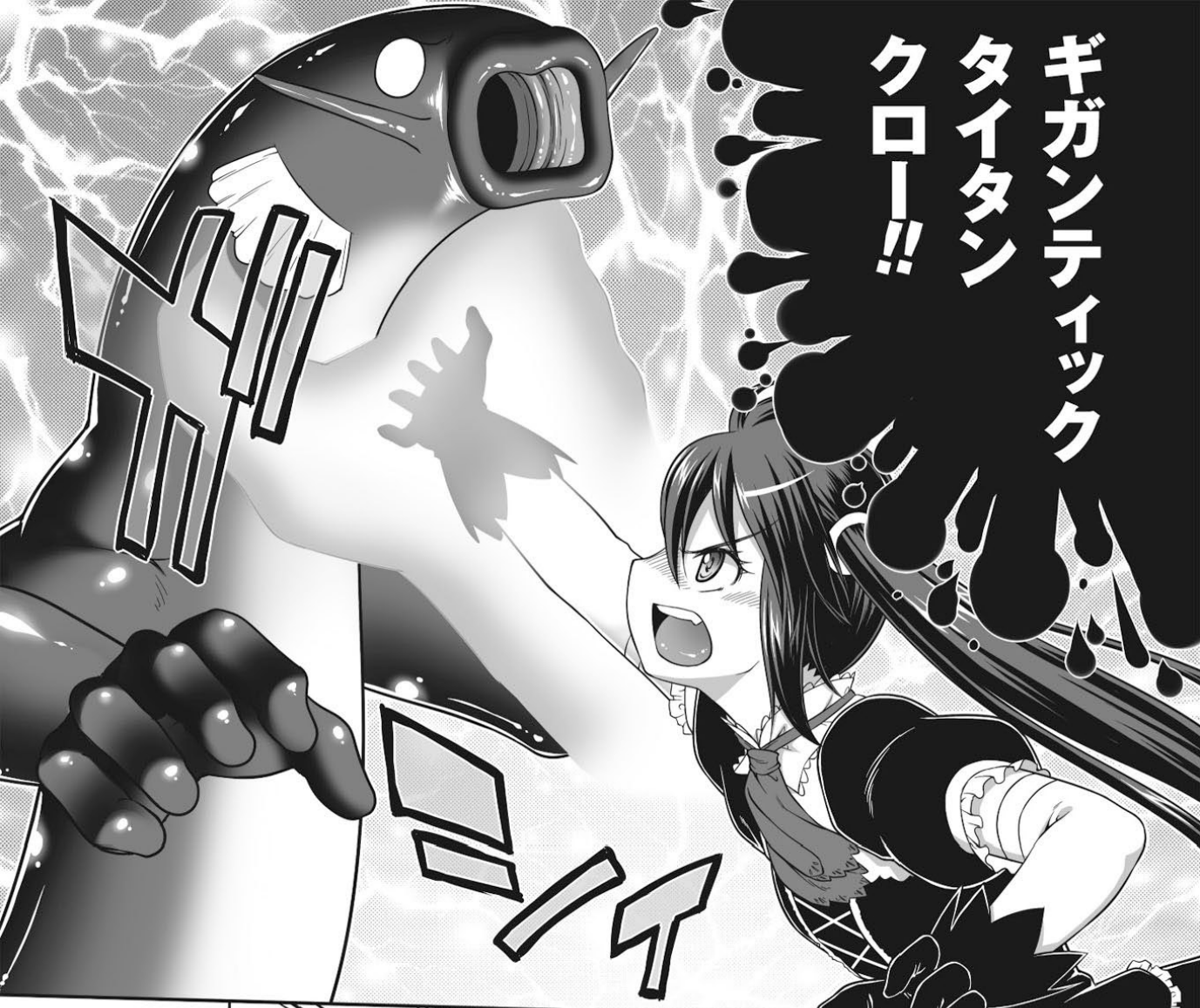
なんなの!?!
なんなのよもう

必

殺

くらえ!

ギガンティック
タイタン
クロー!!



ややや!?



私のヌルヌルボディに
掴み攻撃など一切
効かないニヨロ!!

イア! タイタンクロー
恐るに足らず!!

ムム...

ふぎゃっ

ニヤリ



今ニヨロ!!
触手空間に
引きずり込め
ニヨロ!!



にや...?
これは...



のわわ

イア!ここでは
私は3倍のパワーを
持つことが出来る
ニヨロ...

ゆけーい!!
子うなぎ達イ!!!





こら!!
ちよっとッ

しゅる

しゅる

しゅる

そんなところ
入らな…

ひゃわっ!?

にゃ…

はわっ

うわわわあ

にゅん

んにゃあ

うっ...

そんなとこ
吸い付いて
どういう
つもりなのよう

フッフッフ
体が火照って
きたんじゃ
ないかニヨロ？

ニヤッ
にやに言っ...

ぬるぬるして
気持ち悪い
だけだっば

イア！
誤魔化しても
無駄ニヨロ！

子うなぎ達の
ヌルヌル液で
発情してしまうが
いいニヨロ！！





あッ

ツツ…
ヌルヌルして
掴めな…

いいぞ、
そのまま潜り込んで
しまえニヨロ!!

入らない
でよう!

ちよっ
そこはっ





イア！イア！
子うなぎ達は狭く
暖かい所が大好き
なのだニヨロツ



はぐッ
うろう



ひゃッ



らめッ

奥に入っちゃ
らめえ



さあみんな
新しいお家に
ゴーホーム!!

ニヤッ!!
ま...まよるか

フフフ
そのまさかだ
ニヨロ!!

再び闇に堕ちたセリーヌ……
その洗脳をより強固とするため、
地下迷宮の魔物たちに犯される！
その果てにたどり着いた、
フェラチオ奉仕の相手とは!?

イセリア 英雄戦記

the Legend of the Acerpa War

第35話 **黒白**のエクスタシー

小説 **酒井仁** 挿絵 **牡丹**

「……」

イセリア英雄公国の第一騎士団長にして誇り高き騎士。

セリーヌⅡアヴァリアレスの全身から立ち上る禍々しい気に、エバとスレアは顔色を失っていた。

「な、なんて強力な邪気……！」

「宝珠が、注ぎ込まれた精液の魔力をすべて吸収したとでも言うの？ 吸収するのは性欲だけに調整しておいたはずなのに……信じられない」

セリーヌがバードベルグ帝国の騎将軍ウォルガードに犯され、愉悦と墮落に突き落とされてから、数日が経過していた。

いちど闇に墮した聖騎士は、欲望のままにウォルガードの腰に跨がり、禍々しき邪気を放ちながら、なお食欲に快楽を貪り続けていた。

「あ、はぁん……っ！ ウォルガードお、もつと……もつと旦那さまのおちんぽ汁を下さいませえっ」

もつとも——そのウォルガードは真っ赤な偽物。錬金術を応用した魔術整形によって姿形を変えた淫祇邪教の教徒である。

スレアはセリーヌを、アリオナ女王のような自我のほとんどを失った、無力な肉奴隷にしようとは思ってはいなかった。

その身に流れる魔の血脈、そして騎士としての技量は間違いなく淫祇邪教の、そして魔王の役に立つ。それをむざむざ捨てるのはあまりにももつた

ないというもの。

セリーヌの能力や魔力を最大限に利用するには、あくまでもセリーヌⅡアヴァリアスとしての自我を保つ必要がある。

故に偽ウォルガードの甘言によって乙女の心を搦め捕り、その上でじつくりと精神と肉体を闇に染めようと画策していたのだ。

（けど、それにしただって——）

肉欲に狂ったセリーヌの性欲は、まさに底なし。

偽将軍は生気を吸い取られ、逞しかった二の腕はもはや枯れ枝のように痩せ衰えている。

しかも——この偽物将軍はもうすでに三人目。

すなわちセリーヌは都合三人分の生命力をたつたひとりで吸い尽くしたことになる。

エバがスレアに目くばせをすると、スレアからの念話が頭の中に飛び込んでくる。

（どうなっているの、これは？ まるで魔王さまに匹敵するほどの魔力じゃないの）

（もとよりセリーヌの身体には魔王さまと同等の血が流れているのだから、不思議はないけど……この状態のセリーヌを魔王さまに引きあわせても大丈夫なのかしら）

セリーヌの発する魔力の凄まじさは、ふたつの宝珠によるもの。

ひとつはゴルヴァーナからいつの間

にか奪っていた宝珠を、スレアが魔道具に作り替えたティアラの宝珠。

そしてもうひとつは偽ウォルガードに一〇〇回中出し射精された結果、セリーヌの胎内に生まれた新たな宝珠である。

このふたつの宝珠はどうやら、スレアのかけた封印を無効化し、まぐわった相手の魔力、生命力までも吸収することができるようだ。

「もう終わりなのですか、ウォルガード……もつと、もつと私のおまんこを味わってくれてもよいのですよ」

「セ、セリーヌさま？ 将軍もお疲れの様子。それよりもあなた様にお渡ししたいものがあります」

スレアの言葉に、闇騎士となったセリーヌはぎろりと剣呑な目を向ける。

スレアがパチンと指を鳴らすと、空間の裂け目から漆黒の鎧が出現する。

「それは……？」

「これはワタシの作った墮天装甲。今のあなた様でしたら、必ずや使いこなせることでしょう」

ほう、とセリーヌが闇色の鎧に向けて右手を突き出す。

すると、鎧は生き物のように不気味な唸り声をあげた。次の瞬間、鎧はばらばらになり、セリーヌの身体を覆っていた。

聖騎士として活躍していた時の鎧に比べると露出が高く、漆黒の鎧の隙間から覗く乙女の肌の白さがいっそう引き立つようだ。

しかも露出度の高さと別に、魔鎧の醸し出す邪悪な妖気に、闇騎士セリーヌは満足げに頷いた。

（セリーヌの洗脳が本当に完璧なものになっていくのか、まだ不安が残る。魔王さまと引きあわせる前に、洗脳をいっそう強固なものにしなければ）

墮天装甲は装着者の魔力を無限に吸収する魔道具。

セリーヌがまだまだ魔王に反旗を翻すようであれば、墮天装甲がセリーヌ自身の魔力を食らい尽くす。これはいわば「保険」のようなものだ。

「それで、私は何をすればいいというのだ」

「……メイズⅢの探索をお願いいたしますわ。実は幾度か探索隊を差し向けていたのですが、最奥部に達する前に何者かに妨害され、ことごとく全滅しているのです」

「さながらメイズの守護者か。そいつを排除すればいいのか」

「排除なり説得ができればそのようにご安心を、導き手も呼んでおります」と、ここでエバが新たな教徒を呼び寄せた。

それは腰まで伸びた漆黒の髪と漆黒の瞳、黒のローブで顔を覆っているの、一見すると男か女かの見分けがつかない。

だがローブの奥の顔は相当に美しい。浅黒い肌がぞくりとするほど色っぽい、長身の美女だった。

「わたくしはエルシダールシーファン。

淫祇邪教の闇司祭をさせていた
「彼女がセリーヌさまをメイズⅢに導くことでしょう。ウォルガードさまのために、ぜひ」

「ふん、お目付役ということか……ウォルガードさまのためとあれば致し方ない。では行って参りますわ、ウォルガードさま」

「ふお……おお……つ」

絞られすぎて息も絶え絶えな偽将軍に熱烈な接吻を浴びせると、魔騎士セリーヌはエルシダとともにグラマトン聖教会を後にしたのだった。

（ふん、これがイセリアの第一騎士団長セリーヌですの……いえ、今は闇騎士セリーヌかしら）

闇司祭を名乗るエルシダは、二二四歳になる上級魔族。

と同時に、彼女は同性愛者だった。セリーヌとともにメイズに潜ったエルシダは、ねつとりと絡みつくような視線をセリーヌに向けていた。

（闇堕ちしてもなお美しい女騎士……けれど、あの強力な魔力は魔王さまにとって十分すぎる脅威となる。さてその力量、わたくしの影術で量らせていただくこうかしら）

影術とは彼女のもつとも得意とする上級魔法。

変幻自在な影を用いて敵を攻撃するだけでなく、特殊な影空間に相手を取り込み、そこで思うがままに調教する

ことが可能なのだ。
もつとも——気に入った相手を調教するのはエルシダの趣味のようなものであるが。

「セリーヌさま、先はまだ長いですわ。少し休憩しては」

「いらぬ氣遣いだ。早くメイズ探索を終えて、またウォルガードさまと激しく愛しあいたい……」

相手が偽将軍であることも知らず、セリーヌは目元を赤らめる。その発情した横顔に、エルシダはごくりと生唾を飲み込んだ。

（エバさまはセリーヌが完全に闇堕ちしているかどうか、まだ確信がないと仰っていた。ならわたくしがここでこの女を屈服させて、しかるのちに魔王さまに献上すれば）

それは闇司祭としての自分の地位をより確固たるものにするだろうし、エバもきつと喜ぶことだろう。

そして気がつけばエルシダは影術を全開で放出し、セリーヌを影空間に引きずり込んでいたのだ。

「貴様……何の真似だエルシダ」

「ほほほほ、いくら闇堕ちしてもこの空間では何人もわたくしには逆らえませぬわ。さあ、女同士の愛し方を教えてさしあげますわ」

影がセリーヌの手足に絡みつき、自由を奪う。反射的にそれを引きちぎろうとするが、影は容赦なくセリーヌの大きく露出した白い肌部分にエルシ

ダは指を這わせ、首筋に唇を押し当ててれるりとねぶり上げる。

「くっ……貴様、無礼な……ッ」

「すぐに甘いよがり声を漏らすようになりますわ。そうすればセリーヌさまは身も心も魔王さまのもの……」

影がまるで触手のように、墮天装甲の内側に潜り込んでくる。

こりこりと乳首をひねり上げられると、突起はたちまち硬くしこり、セリーヌは眉根をひそめて身をくねらせた。

「ふわっ？　く、はあああんっ！」

「あれだけじつくりと犯され続けたんですもの。いかに強大な魔力を得ても、この身体はそうそう愛撫の快楽を忘れはしませんわ」

闇司祭の手が露出部分を這いまわり、触れられた部分が火照り始める。

「わたくしとしては、セリーヌさまが馬鹿な気さえ起こさなければそれで結構ですの。さあ、何もかも忘れて、快楽に浸ってください」

「んんっ……！」

エルシダの舌がセリーヌの唇を割り、甘い唾液を流し込んでくる。

淫祇邪教の教徒たち、そしてウォルガードの巨根に貫かれた時ともまた違う快感。

女同士だからこそ味わえる淫らな舌の動きに、セリーヌは目元を赤らめ、自分からも舌を絡める。

「んっ、んふう……れる、ちゅぱっ」

「ふふ、やはり快楽にはあらがえないのですね、セリーヌさま」

エルシダの言葉に、セリーヌがたやすくうろたえる。

それほどまでに、ごく自然にエルシダとのディーブキスを受け入れていた自分が、たまたまなく恥ずかしく感じてしまう。

「こんな……キス、ごときで感じ、んんああっ？」

だが、エルシダの自信たっぷりの様子は変わらない。

セリーヌの強がりを見抜いているように影を操り、脇の下や首筋といった、敏感な部分をピンポイントで刺激してくる。

「うふふふ、うなじから背筋を撫でられるの、お好きですよええ」

「ひふう、そこ、べろべろしちゃらめえ……頭の奥、じんじん痺れちゃうのおおっっ！」

エルシダの愛撫は想像以上に巧みで、闇騎士の肌にはたちまちうっすら汗ばみ、桃色に染まり始める。

（そうだ……教徒どもに犯されている時、エバは魔鏡に私の姿を記録させていると言っていた。エルシダはそれを見たのかもしれない）

疣だらけの指にクリトリスを握ねまわされ、長い舌に尻穴をねぶりまわされ、よがっていた自分。

エバの流し込んだスライムザーメンをひり出しながら、絶頂に達していた自分。

そんな恥ずかしい痴態の一部始終を、この闇司祭が見たかもしれない。そう

思うと、頭の芯が羞恥でかあつと熱くなる。

と同時に、下腹部が熱く火照り、内腿を「つうつ」と蜜液が伝い落ちるのを感じた。

「あつ」

黒のローブをまとった美女は、そんなセリーヌの反応などすべてお見通しだとも言うように、下肢の付け根に食い込んでいる墮天装甲の隙間から指を潜り込ませてきたのだ。

くちゅっ……じゅち、じゅぶ……。

少し指をそよがせただけで、影空間にたちまち湿った音が響く。

「うふふふ、おまんこがもうこんなにぐしょ濡れですよ」

「あつ、んああつ」

楽器を奏でるような繊細な指の動きに合わせ、影がセリーヌの股間を撫でまわすと「じゅわつ」と熱い蜜が漏れる。

これまでも何人も男どもや、陰茎を生やしたエバに犯されたりしてきたが、エルシダの愛撫はそれらとは一線を画していた。

二〇〇年以上、同性を犯し、愛しよがらせてきたそのテクニクに、セリーヌは身悶えずにはいられない。

「くっ、う、ふああ……っ」

「うふふ、可愛い喘ぎ声ですわ、セリーヌさま。これから女同士の快楽をたっぷり刻み込んで、貴女をわたくしの支配下に置いてさしあげます」

支配下……その言葉を聞いた瞬間、

セリーヌは淫祇邪教教主の言葉を鮮やかに思い出す。

「英雄王がもたらした平和もまた、支配ではないのか？」

あの時は何を馬鹿な、としか思わなかったが、セリーヌは不意に腑に落ちた。

支配する者が誰かなのではない。

支配される側からすれば、それは限りなく同質のものでしかないのではないか。

今ここでエルシダの支配下に下ったとして、それは魔王に忠誠を誓うことと何が違うというのか。

（ああ———そうか。そういうことか）
セリーヌはふと笑いの衝動に掴まれ、くつくつとエルシダの腕の中で苦笑を漏らす。

「な、何がおかしいのかしら、セリーヌさま……えつ、何ですの、この力は」

「くくつ、どうやら興奮に身を焦がしているのは私だけではないようだが、エルシダ。我が墮天装甲がお前の昂りを感じてわなないている」

先ほどまで、エルシダの影術に翻弄され、悶えていたセリーヌの豹変に、闇司祭は言葉を失う。

（何かまずいですわ、ここは主導権を取り戻さないとい）

「もう、遅い———」

漆黒のティアアラ、そして闇色の鎧が不気味に唸り、エルシダの影をすべて破壊———否、食らい尽くす。

「きひいいいいいっ？」

「案ずるな、殺しはせぬ。我が臣下としてせいぜい働いてもらおう」

ずるり、とセリーヌはエルシダの首根っこを掴まえたまま、影空間を抜け出る。

「ひいいいっ？」

「私とて、伊達に帝国と渡りあつてきたわけではないぞ。傀儡となり、この身をもつて親友であり戦友のフィオナを凌辱したこともある……」

そう———闇に墮したとはいえ、セリーヌは歴戦の勇士。

幾度となく汚され、犯され、絶望の淵に突き落とされようと、立ち上がったきた経験がある。

ましてや今のセリーヌにはふたつの宝珠の力と墮天装甲がある。

にんまりと不敵な笑みを浮かべると、セリーヌは闇司祭を強く抱きしめ、唇を奪う。

漆黒の鎧が不気味に輝くと同時に、先ほど吸収した影以上の魔力がエルシダの意識を縛り上げ、快楽中枢に働きかけてくる。

「んううううっ！ んつ、ああ、れる……んちゅうう……っ」

騎士の腕の中でエルシダの身体からくたりと力が抜ける。

（ら、らめえ……テクニクじゃ負けない自信はあるけれど、こんな、魔力任せの攻撃、防ぎきれない……）

その時、むんずとエルシダのヒップが掴まれる。

そのまま「揉み、揉み」と尻を揉みながら、指先がローブの上から尻の割れ目の奥をまさぐってくる。

「さあ———我に身を委ねよ」

「は……はあ……あんっ！」

ぐいっつ、と腰を抱き寄せられたエルシダの身体がびくんと跳ねる。

尻の奥、アヌスを指でほじられ、ローブの上から乳房を吸われる、たったそれだけの愛撫なのに、身体が火照ってたまらない。

「ああ———セリーヌさまあ……」

壁に埋め込まれた発光石の光が、手足を絡めて横たわるとの美女の姿をうつつら照らす。

エルシダの魔力を吸い上げる度に墮天装甲が妖しく光る。

そうしてすべての魔力が吸い尽くされた時、二〇〇年以上生きてきた闇司祭はあり得ないほどのエクスタシーに気を失っていた。

「やれやれ……これでは先が思いやられるな」

エルシダが気付くのを待って、セリーヌはさらにメイズの深部を目指すのだった。

「はあつっつ！ やあああつっ」

「か、影縛り……！」

メイズを守護する謎の存在を排除すべく、最奥部を目指すセリーヌとエルシダ。

だが、深くなればなるほど出現する魔物は強くなっていく。

魔王に比肩するほどの魔力を得たセ



リーヌにはそれでもまだ物足りないほどだが、闇司祭はさすがに疲労が色濃く見える。

いやそれ以前に、影術すら食らい尽くしたセリーヌにさんざんよがらされた後だからなおさらだ。

「はあ、はあ、はあ……セ、セリーヌさま。す、少し休みませんか」

「……………」

セリーヌは答えない。

この先に凄まじい魔力を秘めた魔物がいることに気付いたのだ。すなわちこの先こそはメイズ探索の目的地。

(スレアの言っていた守護者か……力量は感じるが、魔力を巧みに抑えている。相当に古い種族か……?)

だが、その巨大な魔力を感じれば感じるほど、騎士を包む漆黒の装甲は期待に打ち震える。

その食欲さたるや、魔王すら上回るのではないかと思わせるほどだ。

(ふふ、それもまた一興か)

闇に墮したといっても、セリーヌの中には素直に魔王に膝を折らぬという気持ちがあった。

無限に魔力を吸収するという墮天装甲——それが魔王のすべてを喰らうというのなら、セリーヌ自身が魔王になり変わってこの世を総べても構わない。

そういう意味では、確かにセリーヌの中にはまだ聖騎士だった部分が残っており、その洗脳は完璧とは言えなかった。

沸々と身内より湧き上がる魔力を胸に、エルシダを従えて狭い洞窟を抜けた、その時だった。

「……セリーヌさま？」

「！ さがれつ、エルシダツツ」

その時——咄嗟に闇司祭を庇ってしまったのはなぜだろう。

あるいはそれが「支配する者の責」なのか。

凝縮された魔力が向かってくるのを感じた瞬間、セリーヌはエルシダの前に立ちまはだかり、自らその攻撃を食らってしまったのだ。

(くううつ、な、何だこの攻撃は?)

それは単なる攻撃弾ではない。メイズそのものを揺るがすほどの巨獣の咆哮とでも言うおうか。セリーヌの身体を打ちすえた魔力が洞窟内に拡散し、石壁の発光石がまばゆく光り始め、そこにいた「もの」を照らし出す。

大きく開けた巨大洞穴に佇んでいた小山ほどもあるうかという巨体に、エルシダは声を失う。

「な……………り、竜……………」

見上げねばならないほどの巨体は漆黒。発光石の光に黒光りする漆黒の鱗はまさに伝説級のドラゴン。

背に生えた四枚の翼をばざりと広げたその姿は、まさしく魔物の王たる風格に満ちている。

そしてその燃え盛るような瞳には、明らかに知性があった。

「私の名はエスبرانサー……かつて暴竜と呼ばれ、魔王軍と戦いしメイズ

の番人」

「あ、あなたが淫祇邪教の探索隊を全滅させていたんですね。あなた、反魔王軍ですか？」

どうかな、とぐつたりと倒れ伏したセリーヌとエルシダを見下ろし、黒竜は不気味に笑う。

「人の子と話すのは久方ぶり。我が発情の咆哮によってその肉体が極上の餌となるまで、楽しませてもらう」

「は、発情の咆哮……………」

「あつ、あああ……………つっ！」

その時、美騎士が石床の上で悶えのたうつ。

その声は甘く、明らかに快美の愉悅に満ち満ちている。

「ぐうふふ、人間というのは餌としては劣悪だが、発情した、特に女の肉は特別な風味を持つのだ」

「な、何ですって……………」

「しかもその女、ただの人間ではないな。ただ美しいだけでなく、危険な香りがする。その肉をたつぷりと悦楽で満たせば、さぞや稀代の美味になるだろうて」

(こいつセリーヌさまを食う気?)

神々の時代より存在する竜族には、かつての英雄王も助言をもらいに赴いたとエルシダは聞いたことがある。

その態度を見るに、反魔王側というよりは中立に近そうだ。

「ああつ、ひ、ひふううう……………」

ドラゴンの特殊能力「発情の咆哮」を浴びたセリーヌが身をくねらせて石

床の上で身悶える。

強制発情させられているため、エルシダはセリーヌの支配から脱し、正気を取り戻していた。

闇司祭の心に逃走あるいは竜族との交渉というふたつの選択肢が浮かぶ。

その間にも黒竜は人間を一飲みできそうな巨大なあぎとを開いた。焔のように真っ赤な舌を突き出したかと思うと、いやらしく美貌の騎士の身体をねぶり始めたのだ。

「ぐうふふふ、何とも滑らかな乙女の柔肌よ。汗の臭いまで芳しい」

「ひい、ひああああつ」

れるれる……………じゅるつ、じゅるつ。

竜の舌はあたかも触手のごとくに蠢き、セリーヌの肌を這いまわる。

女体はたちまち竜の唾液まみれになり、敏感な部分をくすぐられてひくひくと痙攣する。

明らかに——竜は女をねぶりまわし、悶えさせることに慣れていった。

特に墮天装甲は露出が多く、鎧と肌の隙間に舌先が潜り込んで、セリーヌの身体のあらゆる恥ずかしい部分を刺激するのだ。

「ひいっ、そ、そんなところまで……………」

ああつ、頭が沸騰しちゃううつ

「存分に乱れよがるがよい、正気を失って発情に狂う女の肉ほど、滋味深いものはないのだ」

竜に人間のような性欲があるとは思えない。

だがエスبرانサーの瞳は爛々と輝

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>